麻原彰晃の世界 PART13

# これが尊師！

麻原尊師、インタビュー特集

麻原彰晃



麻原彰晃の世界 PART13

# これが尊師!

麻原彰晃

麻原尊師、インタビュー特集





## はじめに

　宗教界をはじめ、今一番マスコミで騒がれているのは、もしかしたら、オウム真理教教祖、麻原彰晃尊師なのではないだろうか。二年以上前から、絶えずどこかの記事、テレビに出ているといった感じである。

　その報道内容も、今までのものは、オウム真理教本来の姿ではなく、マスコミによって捏造(ねつぞう)された、ダーティ・イメージのものが多かったが、最近のものは、徐々にオウム真理教本来の姿を伝え

ているものが増えてきた。特に、学者などの有識者にはもともと認められてはいたが、その賛同者もより増えてきているように思われる。

なぜ、このように流れが変わってきたのか——それは、〝新新宗教ブーム〟という言葉で表わされるように、様々な方々が精神の充足を求めて、宗教の世界の探索を始め出したからではないだろうか。そんな中で、真に自己を確立できる道を示しているオウム真理教の教えがクローズ・アップされ出したのかもしれない。

今回は、その麻原彰晃尊師がマスコミの取材に応じられた記事、インタビューの特集を組んだ。

麻原尊師が一般の方々に向けて平易な言葉で深遠な教義を説かれているので、お読みになれば即、「ああ、そうだったのか」と様々な疑問が氷解していくことだろう。

本書が、〝本当の自分〟を追い求めるあなたの小さな助けにでもなれば、この上もない喜びである。

一九九二年一月

オウム真理教広報編集部



麻原彰晃の世界 ❖ PART13

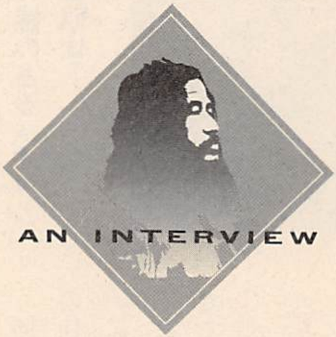
# これが尊師！

―目次―

※表記に関しましては、正確な仏教用語にするために、一部訂正しています。ご了承ください。

# 第1話

# 宇宙観に見る一つの道




『360』

1992年2月号より

取材・構成／松永憲生

**バブルがはじけた世紀末、多様化の時代に呼応するかのごとく、百花繚乱の新宗教。中でも巷の話題を独占したかの感のある「オウム真理教」の宇宙観は？**





宗教における宇宙観を考えたとき、キリスト教、イスラム教、仏教の説き明かす宇宙観は本来は全く同じものであり、ただその認識の仕方によって、認識の哲学の違いによって、相違点が出てきているというのが、わたしの今の見解です。

オウム真理教は、原始仏教に起点を置いているので、宇宙も含めてすべての現象は、「心のあらわれ」であるということが根本になっています。では、宇宙の創造





はどういう形で起きたかというと、これは第一番目における宇宙の創造と、中間期における宇宙の創造との、二期に分けることができます。

## ◉第一番目と第二番目の宇宙の創造について

第一番目の宇宙の創造とは、もともと三つのエネルギー（智性・動性・暗性もしくは魔）と、わたしたちの本質（真我、アートマン）とが、ぶつかり合うことによって創造されます。その後に、高い世界で生きていくことができなくなる魂が生じてくるのです。これが、俗に「創造主」といわれるものです。

第二番目の中間期の創造、これは魂の落下のプロセスです。「創造主」といわれる魂の転生に際して、つまりその心の働きに際して、ちょうど粗雑な物質が、まず風の働きにより、一種のコンプレッサー的な働きによって、四方八方から吹き込んできます。そして、その風に水元素、液体状の元素が落ちていき、内側に、結局風が集中した状態で吹き込まれていくわけです。そして、空間内に、成分的に微細な成分と粗雑な成分（別の言い方をすると、比重の軽いものと重いもの）との分化が起き、固形的な空間、液体的な空間、そして本当の意味での空気状の空間という三つの要素が出来上がるわけです。これが、物質的な宇宙の創造のスタートです。

## ◉人間界以上の輪廻転生

ここでまず、神聖球（ヒンドゥー教のブラフマン、キリスト教の創造主の世界）、この創造主の世界

に創造主となるべき第一の魂が落下し、生を受けます。そこでは創造主は、威厳があり、喜び、浮揚、すべてが自在という条件を備えていますが、自分一人しか存在していないという寂しさのために、「だれでもいいから、この神聖世界に降りてこい」と思念するわけです。そのころにちょうど神聖球の上位の世界である光音天から、そこに居られなくなった魂が、一つ二つと落ちてきます。これらの魂は威厳がなく、神聖天に対して自分たちが創造されたと錯覚を起こします。創造主は、自分が思念したから出来上がったのだとして、自分が創造したと錯覚します。これが、創造された者、創造する者の違いというものです。

かなりの魂が神聖世界へ落ちた段階で、だいたい元素の安定が起き、水元素のよどみの空間が現れ、これは白みを帯びた地になります。それを貪りを生起させたある魂がなめ、その地の味が大変おいしいということを認識します。それに



よって、他の落ちた魂も貪りを生じさせ、それを食べることによってどんどん粗雑なものが身についていきます。その段階で彼らは神聖球にいられなくなり、落ちます。これは、その魂の比重が重たくなったと考えてもらったらいいと思います。そして、愛欲界の第六天界、第五天界という形で落ちていきます。

そこでも、より粗雑なものを食べ、やがてその身に排泄機能が生じることになります。同時に性的

器官が発達し、お互いがお互いを欲望するようになります。その段階で、両性の完全な区別と性的な交わりが生じてくるのです。そして、はじめのうちは精液を漏らすということはなかったのですが、やがて精液を漏らすようになり、より粗雑な魂が子宮転生を始めるというプロセスです。

これが、人間界以上の輪廻転生を簡単に要約した話です。

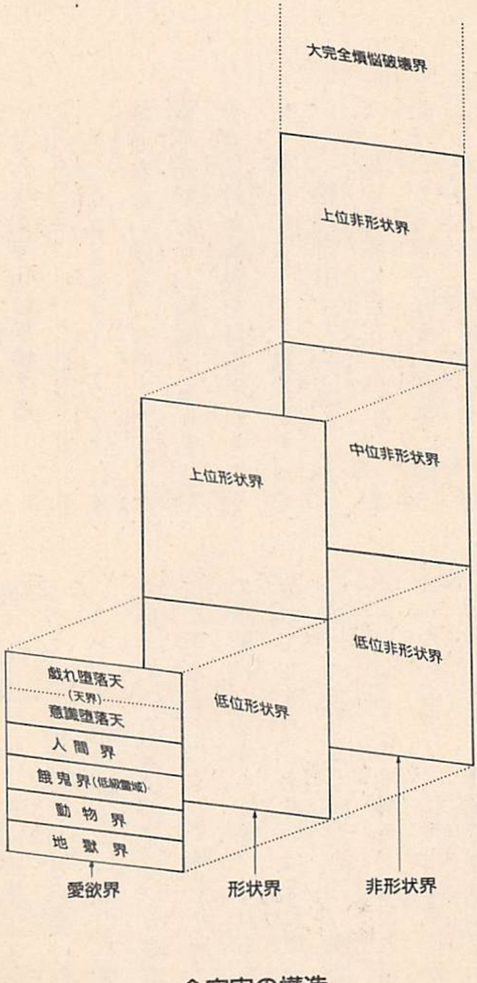
## ◉創造主を超える「わたし」

現在のこの宇宙の状態をテーラヴァーダ（上座部）的に説明しますと、愛欲界があり、そしてその奥に形状界（幻影の身体と心の要素をもった世界）、その奥に非形状界（心の要素の世界）がありま す。つまり、階層宇宙といえます。

これらの宇宙の創造を司るものは、真我における「心の働き」であるといえます。つまり、第一の

創造において、創造と破壊を決めているのは、わたしたちの心の要素、わたしたちの欲求です。第二の創造においては、ある期間幸福を味わい、その間に生じたある種の心の穢れが下位の宇宙をつくり出すわけです。

神がこの宇宙をつくったという考え方はキリスト教だけではなく、インド・ヨーロッパ語族に属する宗教のほとんどが、そのように唱えていますが、その神というのが、先に説明した第二番目の創造における創造主なのです。しかし、真我の独存位というときの「わたし」とは、創造主以上の「わたし」なのです。これが、すべての魂が心の本質には如来の本質を持っているといわれるゆえんなのです。よって、神というのは、魂の一つのフォーム、衣の一つに過ぎず、徳をどんどん積んで粗雑なものを脱ぎ捨てたら、神になるわけです。しかし、まだ神の衣を着ているのであって、その衣を脱ぎ捨てたときが如来の本質つまり真我なわけです。


大完全煩悩破壊界
上位非形状界
中位非形状界
低位非形状界
上位形状界
低位形状界
戯れ堕落天
（天界）
意識堕落天
人 間 界
餓 鬼 界（低級霊域）
動 物 界
地 獄 界
愛欲界
形状界
非形状界

全宇宙の構造

## ◉すべての魂が解脱すれば すべての宇宙は崩壊する

三つのエネルギー（グナ）に干渉されない限り、わたしたちは本来不死であり、輪廻はありません。なぜ仏教が解脱を目指すかというと、解脱によって、真我がもっていた「絶対自由」（心の働きによって、高い世界に自在に再生し、またそこから自在に元の状態に戻ることができる。死は存在せず、心の本質のコントロールによってすべてが自由になること）、「絶対幸福」（悪因悪果、善因善果、というカルマの制約をいっさい受けないこと）、「絶対歓喜」（心の本質が持っている喜びの元を、その本質に至ることによって味わうこと）の状態になるからです。それらを忘れてしまう、あるいはそれ以上に欲ばってしまうがために、快楽と同時に苦しみを味わわなければならないのです。仏教は、そこから解脱によって離脱できるんだと教えているのです。

そして、この離解脱の状態を獲得し、すべての魂にそれを気付かせてあげることが「オウム真理教」の目的です。というのは、この人間まで落ちてきた魂はもう一つ低い「低級霊域」に落ちるわけです。そして、その次は動物、地獄の転生などが生じてきます。決して、今幸せであるからといって満足できない、というのが仏教的感覚なのです。

解脱は、わたしたちを構成している三つの要素、心の要素、言葉（幻影）の要素、身の要素を完全に止滅した段階で到達するわけです。それが真我の独存位で、この状態を「認知経験滅尽」、完全にすべての経験を滅尽しつくしている状態とお考えください。すべての魂がこの状態に至ったとき、最終的にすべての宇宙は崩壊し、第一の創造以前の状態に戻るわけです。

つまり、仏教の宇宙観は、精神科学なんですね。キリスト教の教えも本質的にそうですけれども。

つまり、ある要素（魂の業として の傾向）を蓄積したら、その要素 が支配的な世界へ転生する。その 要素をなくして別の要素を蓄積し たら、別の要素が支配的な世界へ 生まれる。つまり、世界というの は固定的であって、そして、その 要素が完全に必要なくなったら、 その世界は崩壊するという考え方 なのです。

第二の創造と破壊は繰り返され ます。破壊期に入ると、ある魂は 人間の世界からもう少し上の世界 へ入り、そして神聖天へ入り、光 音天の世界へ入るというプロセス を取り、ある魂は別の世界の地獄 へ行ってしまいます。これは、仏 教、キリスト教、イスラム教でも 同じことを説いています。

## ◉科学の方法論と仏教の正観

さて、科学をどう捉えているか というと、科学は観察と思索を繰 り返して、一つの方向に答えを出 そうとしていると思いますが、ま



さにこれは仏教的なトライと同じです。仏教でいう正観（正しく観察すること）です。

つまり、現象のあり方や心の要素を観察することによって、宇宙の意義、創造の意義、創造の蘇生といったものを理解すると同時に、観察に基づき得られた結果を、どう生かせばよいのか、を実践することが真理、宗教ですから、立場としては同じ立場をとっているわけです。

## 第2話

# 新宗教の選び方




『流行通信HOMME』

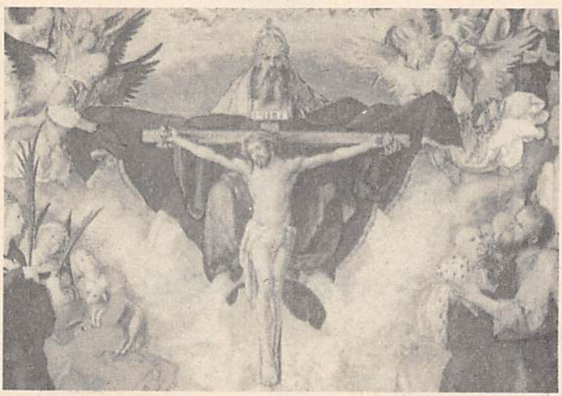
1991年9月号より

文=日向優子(流行通信社)

教祖は神か？　神の代弁者か？　教祖のカリスマ性とは？——かつての教祖、キリストは十字架にかけられ、マホメットは一時メッカをおわれた。現代を生きる教祖たちは、なぜこの時代を選び、何を伝えようというのか。そして我々は、彼らに何を期待するのか。

——まず、なぜこの道に入られたのか、そのあたりからお聞かせ願えますか。

**麻原**　ひとが修行に入る場合には、



いろいろな条件があるわけですけれど、本質的には一つなんですね。〝三苦〟を経験して修行に入る。

では、その三苦とは何かというと、まず第一は痛みとか心の苦悩といった本質的な苦しみ。殴られたら痛いとか、生まれながらにして肉体に欠陥があるとか、そういう場合ですね。第二番目は変化。例えば、それまで美しかったものが事故にあって壊されて醜くなるというような、幸福が壊れるときの苦しみ。それから第三番目は、求めたもの



が手に入らないという苦しみ。いずれにしろ、この三つの苦しみのどれか一つにぶつかって、修行に入るわけです。

わたしの場合は、〝無常〟。すべての現象は変化するものであり、その変化は止めることができない。そこで、変化しないもの、絶対的なもの、本質的なものを求めて修行に入ったわけです。

――これが絶対であるというものがもう見つかったのでしょうか。それとも、それを見つけるために、いま修行されているのでしょうか。

**麻原**　わたしの状態というのは、仏教的な言葉を使うならば〝イェシェ〟といわれる段階です。〝イェシェ〟というのはチベット仏教の高僧であられるカムトゥール・リンポチェがわたしの体験をお聞きになったときに使われた言葉で、「コンプリート・アブソリュート・ディバイン・ウィズダム（完全なる絶対なる神の叡智）」という意味です。それをもって最終解脱とします。



つまり、仏教にはヒナヤーナ（＝小乗仏教）、マハーヤーナ（＝大乗仏教）、それからタントラ・ヴァジラヤーナ（＝秘密真言金剛乗）というレベルがあるわけですが、その最終の段階、最終のステージにあるということです。ですから、不変のものを得た状態といえるのではないでしょうか。

——幽体離脱を経験して、それから修行を始められたと聞いておりますが。

**麻原**　いや、幽体離脱を経験した

のは三歳ぐらいのときからで、それは単なるプロセスにすぎません。幽体離脱や霊現象というのは、わたしにとっては少しも楽しいものではありませんでした。

――そのあたりから宗教に興味をお持ちになったわけですか。



**麻原** それが即、宗教に対して興味を示させたわけではないですね。逆にアンチ宗教でしたからね、二十一歳くらいまで。神に頼むことが嫌いだったというか、小さいときから仏壇・神棚に礼拝はしていましたが、神仏に何か頼むという

ことは敬遠してました。その気持ちというのは、いまは理解できますけどね。

つまり、仏教というのは仏陀（＝覚醒者）の教えであると同時に、仏陀になっていく道で、「ただ単にお祈りして依存するというのは正しくない」ということを小さいときから知っていたんだと思いますね。言い方を換えるならば、仏教イコール自己開発の道だということですね。自分自身を開発して、最終的には自分の本質的なものに到達する。そういうことを小さい



ときから知っていたから、実際にそのような教えにぶつかるまで、いろいろなことを学んでいたんじゃないでしょうか。

――日本では大乗仏教が主流といわれていますよね。それに対する反発があったのですか。

**麻原**　いや、大乗仏教に対する反発というよりも、本当の大乗仏教が伝わっていないということに対する反発ですね。大乗仏教の本質というのは、あるひとが修行し、そして仏陀になる。目覚める。そして、その経験、ヴァイブレーション、力によってすべてを済度する教え、これが大乗仏教なんです。ところが、いまの日本では、その前段階の「努力して覚醒に至る道」というのを説いていない。そこには経典しかなく、絵に描いた餅しか存在していない。そういうことに対して疑問がありましたね。真の大乗というのは、小乗の上に立脚するものだと考えていましたから。

――それでは、アンチ宗教だった

のが修行を始められたというのは、何か具体的なきっかけでもあったのですか。

**麻原**　一つには、結婚前後の心の変化ではないでしょうか。現代では、安らぎは家庭にあるというふうに教えられていますよね。ところが、真剣にそれを意識すればするほど、現実の生活というのは苦の集まりなんですね。結局、そこにも自分の安らぎというものはなかった。そう思った瞬間から激しい修行の道に入っていました。

ただ、いまから考えると、わたしの人生イコール修行といえないこともないですけどね。例えば、スポーツや武術も時間があれば朝から晩までやるという具合いに、一つのことを極めることについては小さいころから性質としてありました。ヨーガにしろ仏教の修行にしろ、そういう性質——これは精進（しょうじん）というんですが——その土台は確立していたんではないかと思います。

——ところで、オウム真理教と仏

教の関係がちょっとわからないのですが、そのあたりを教えていただけますか。

**麻原**　「オウム真理教」というのはまず、宇宙の本質的な創造・維持・破壊、これを〝オウム〟という言葉で表わしています。つまり、無常を表わしているわけですね。そして、〝真理〟というのは、サンスクリット語でサティヤン、パーリ語でサッチャというんですが、絶対的な叡智を表わす。

なぜ何々宗とか仏教という言葉を使わないかというと、先ほども申し上げたとおり、いまの日本には真の仏教が伝わっていないと確信を持ってますので、仏教という言葉を使うと逆にその教えが広めづらくなる、そう考えて「オウム真理教」という名前を使っているわけですね。また、お釈迦様（しゃかさま）が初めて衆生にダルマ（＝教え）をお説きになった初転法輪、これは『真理相応』というお経の中で示されてますが、その中でも要するにお釈迦様は「これが仏教である」



とは一言もいってらっしゃらない。「これが真理である」といってらっしゃるわけです。ですから、仏教の教えを説く場合、やはり〝真理〟として説くべきであるというのがわたしの立場です。

## ◉麻原尊師のリアリティとは？

──麻原さんご自身について、ちょっと質問させていただけますか。

入口の大きな下駄箱の〝尊師〟と書かれた一列に、おそらく麻原



さんのものだと思いますが、白いスニーカーがありました。まったく当たり前のことですが、麻原さんも肉体をもっているんだなあ、と妙に納得させられました。そこで、ひじょうに下らない質問で恐縮なんですが、身長と体重を教えて下さいますか。

**麻原**　そうですね、いまはちょっと病んでまして、体重が八三キロぐらいじゃないでしょうかね。身長が一七四・五センチぐらいじゃないかと思います。

――血液型はなんですか。

**麻原**　A型です。そういうものにみんな、興味を持つものかなあ

（笑）。

――何といいますか、ある種のリアリティが出ますよね。麻原さんというのは「これくらいの大きさで、ちゃんと血液も流れているんだ」となんとなく想像できますよね。そういうことで、お聞きしたいなと思ったのですが。



**麻原**　そういうリアリティが出ても、意味がないといったらいいのかな。この身体というのはあくまでカルマの幻影で、別の身体がたくさんありますから。例えば、アストラル・プロジェクション（＝低位形状界に飛び出すこと）での身体というのは、この身体ではな

いですよね。あるいは、心の広がりを経験する身体というのは、また別の身体ですよね。

——それはどのように考えたらよろしいんでしょうか。

**麻原** そうですね、それは菩薩、正確な言い方をするなら〝到達真智運命魂〟と訳されるわけですが、つまり、真の智慧に到達することが運命づけられている魂には十段階ありまして、その魂のステージをいまいった化身の数ではかるわけです。最終的には六つの身体を有すると。さらに、修行が進むことによって一つの世界でも無数に身体を使えるようになりますから、これは無限になります。

この肉体も一つの身体でありますが、これは老いるものであり、そして死ぬ。最終的には粗雑な五大元素（＝肉体を構成する五つの要素）に還元される身体ですよね。だから、この身体を論じたからといって、だれも利益を得ることはないでしょう。

——そうすると〝十二縁起の法（＝

解脱へ至るプロセス）〃を終えられた麻原さんは、死というものを超えた存在なんですか。

**麻原**　ええ、わたしには死はありません。肉体は、死ぬ時期が来れば捨てる。そういう意味では自由です。再生することも自由。転生というものもありますし。

——教祖としての麻原さんに一つお聞きしたいと思います。宗教には〝救い〃という命題が必ずあります。麻原さん自身はそのあたりをどのように考えられていますか。

**麻原**　救いというのはすべて条件と原因、救われる原因と条件の二つがあって生じるものです。もちろん、わたしたちの修行というのは、回向（えこう）、つまり自分たちの積んできた修行の結果をすべての魂に還元するという瞑想をします。そういう意味では「すべての魂に救いがあってほしい」と願ってはいますが、そういう種子にないひとたちに対して手を差し伸べるのは難しい。

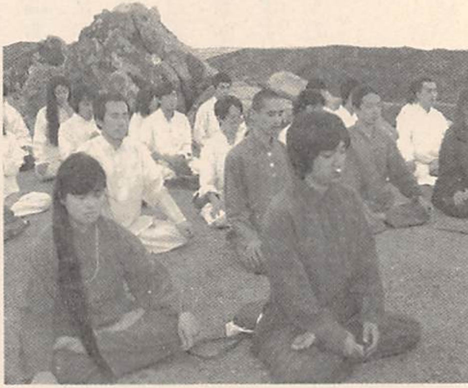
ただ、未来においては、未来と

いうものはわたしが死ぬまでという意味ではなく、生まれ死に生まれ……という輪廻転生の長いときを経て、すべての魂に救いがなされるんじゃないでしょうか。それが覚者といわれる、菩薩といわれるひとたちがこの世に生を受け、生きている意味合いですから。

——いまは〝第三次宗教ブーム〟といわれ、一九七三年ごろから様々な新宗教が生まれているわけですが、オウム真理教以外の新宗教についてどうお考えですか。若者が宗教的なものを必要としていることについては。

**麻原**　結局、心というのは、物質によって満足するようなものではないということですね。満足させようと考えると、ある人は歌を聞いたり本を読んだり、より物質から遠い方向にベクトルが向く。その最終段階に〝心の本質〟というものがあって、宗教選びがはじまる。

第一次、第二次宗教ブームはどちらかというと個より全体を基調



とした宗教ですが、自分の内側の苦しみを克服するには自分自身を変化させるしかない。第三次ブームは、まさに個人を変化させるいろんな宗教の勃興だとわたしは考えています。それは時の流れという一つの条件と、個人個人の苦しみという原因、この二つが合わさっていろんな法、ダルマが生起してきたんじゃないでしょうか。ですから必然的な第三次ブームだと考えます。

## ◉新宗教を選ぶための八つの基準

——他のいわゆる新宗教に対してはどうお考えになっているのでしょうか。

**麻原**　それはそれぞれの教祖の方が、いろいろな形をおとりになっているのでしょうから。

　ただ、一つ読者の方に宗教の選び方として、「こういう条件でお選びになったらよろしい」というのはあります。これが、〝聖なる八支の実践〟といわれるものなんですね。日本には「八正道（はっしょうどう）」という言葉で伝わっていますが、その本質が誰にも理解されていません。

　まず、この世の中も含めて、すべての世界観を通しての正しい見解、正しい教えがある教団かどうか。それが第一ですね。そして、それに基づいてきちんと思索をしているかどうか調べなさい。次に、人々を利するような、理性を向上・発達させるような言葉を訓練しているかどうか。四番目としては、衆生を利するような行為をしているかどうか。五番目は、それに則ると、苦しみが減少し楽が増大するような生活を説いてるか。次は、日々の生活において、いま為している善いこと、つまり善法を増大

させ、いま為している悪業を捨断（しゃだん）する教えを説いているか。七番目は〝サマディ〟（＝肉体から自在に離脱し、心の本性に還ること）に入るための教えを説いている教団であるかどうか。そして最後は、サマディについての教えを説いている教団であるかを調べなさいということですね。

なぜこの七番目と八番目が必要なのかというと、この二つによって、自分自身で教義の世界を経験できるわけですね。

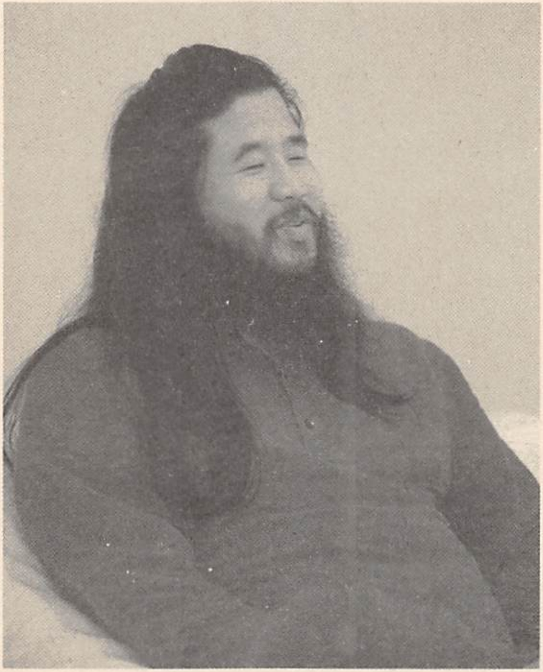
そして、もっともやってはいけないのは、盲信するということ。要するに、必ず宗教は疑いなさい、と。疑いながら、自分のいま持っている考え方とその宗教の説いている考え方と、どちらが幸福を与えるかどうかを検討しなさいということですね。

この八つの実践方法によって教団をチェックなさるならば、その宗教が自分に利益を与えるか不利益を与えるか、理解できると思います。

――では、最後の質問です。新宗教の場合、創始者の時代はいいんですが、二代目、三代目あたりで、その教団がこれから栄えていくか、それとも消えていくかわかれますよね。麻原さんにもいずれ肉体的な死が訪れるわけですが、その先のことはどうお考えですか。

**麻原**　少なくともダルマは残りますね。オウム真理教は、おそらく続いていくでしょうね。おそらくというのは、未来は未来のひとたちが決定することであって、わたしが決定することではありませんから。

仏教的世界観というのは面白いもので、決定的な未来がないんですね。つまり、いくつかの様態があって、百パーセント確定というのはありえない。その瞬間のデータを総合すると「こうなる」といえるのだけれど、それからまた何らかの変化があった場合、大きく変わるでしょうから。



## 第3話

# 出家修行者の修行と願望成就の秘法




『女性佛教』
1991年10・11月合併号より

私は、オウム真理教の教祖として、あっという間に有名になってしまった。ひょっとしたら、この日本で私を知らない人なんていないんじゃないかな、とさえ思うこともある。

たとえば――まあ、私は目が悪く、あまり外に出ないし、出たとしても大抵自動車を使うので静かなものだが――飛行機や新幹線を使わざるをえないときなど、一般の人に写真をとられたり、握手やサインを求められたり、あるいは女子高校生のグループに「キャーッ」と騒がれたりするのである。

先日もチベットへ行ってきたのだが、カメラを持っている日本人観光客は必ずと言ってよいほど私の写真を撮るのだ。同行の弟子たちがそれを制止するのに大変だったらしい。

そういえば、インドへ修行にいくときも、私に興味を持っていたらしいインド人女性が日本人スチュワーデスと一緒に、

「ぜひ話をさせてほしい」

とやってきた。
　しかし、と私は思う。オウム真理教や私麻原彰晃がこれほど有名になったのは、例のオウム・バッシングがあったからで、はっきり言って、あまりよい意味での、〝有名〟さではないのではなかろうか？
　これはひどいな、と思ったのは、外国のマスコミの取材を受けたときのことである。なんと、その取材者の国では『オウム真理教では、入門の儀式として入門希望者に多量の水を飲ませ、体を清める』などという、とんでもない誤情報がマスコミを通じて流されているのだという。
　海外でさえこんな調子であるから、オウム・バッシングの本場（？）日本では、推して知るべしである。
　ちなみに、この誤情報は、クリヤ・ヨーガに尾ひれがついて伝わったものと思われる。クリヤ・ヨーガとは、インドのヨーギーが肉体的に浄化をしたり、病を治したりするのに用いている行法で、オウ

ム真理教もこれによって抜群の効果をあげているのだ。また、クリヤ・ヨーガは空中浮揚と呼ばれる神通力を獲得するのに有効な行法の一つとして、『ズバリ！　浮揚』（オウム出版）の中でも紹介されている。

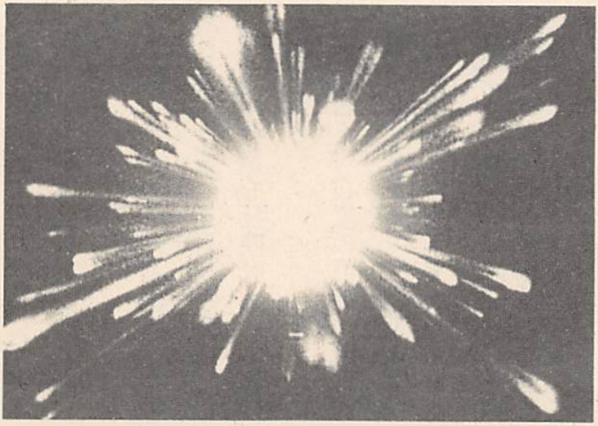
だが、ここでお断わりしておかなければならないのは、クリヤ・ヨーガはオウム真理教の教義の本筋をなすものではないということである。

大体、オウム真理教が原始ヨーガと原始仏教の流れをくむ、非常に真剣な宗教団体だということを知っている人がどれだけいるのだろうか。

このままだと、オウム真理教も私も、単なる興味本位で見られてしまい、いつまでたっても理解してもらえないのではないかと考えられるので、今回は同じ仏教に縁のある『女性佛教』の読者の皆さんに、少しばかり私たちのことを知っていただきたくペンを執った次第である。

まずオウム真理教の名前の由来からお話しさせていただこう。

オウムとはサンスクリット語でAUM、これは宇宙の創造、維持、破壊を表わしている。つまり、この世の諸現象は無常なのだということを意味している。そして、真理の教えと。この真理の教えというのは、釈迦牟尼を始めとする覚者（仏陀）方の教えと同義なのであるが、日本ではすでにいろいろな仏教の宗派があり、また原始仏教と異った教義を持つ宗教団体が



一般の信徒数五〇〇〇人に対して、七〇〇人の出家修行者がいるのである。

これは、オウム真理教が、本格的に解脱と悟りを目指す教団であるという性格を反映しているものと思われる。

もちろん、在家の信徒の中でも解脱、悟りを目指して修行している人が多いし、そうでない人も功徳を積み、戒を守り、教学し、瞑想をするという修行を通じて現世的に幸福になること、あるいは人多いので、その混同を避けるために〝真理〟という言葉を用いたのである。

このように、オウム真理教の名前には深遠な意味がかくされているというのに、新聞、雑誌、テレビ等がよく省略して〝オウム教〟などと書いたり言ったりしている。これだけは何とかならんものかなぁ、と思う。

さて、このオウム真理教の特徴といったら、出家修行者の割合が多いことなのではないだろうか。

間界以上の高い世界への転生を望んでいるのである。

それでは、出家修行者の修行というものについて触れてみたいと思う。

オウム真理教での悟り、解脱を示すステージは、下から順にラージャ・ヨーガの成就、クンダリニー・ヨーガの成就、ジュニアーナ・ヨーガまたはマハー・ムドラーの成就と上がっていく。そして、第三段階のジュニアーナ・ヨーガ、あるいはマハー・ムドラーの成就に到達した者が、完全なる小乗仏教の完成を得るのである。これは、いわゆる阿羅漢と呼ばれるレベルなのだ。

こんなことをいうと、

「阿羅漢と言えば、供養に値し、尊敬に値する非常に高い悟りを得た人のことではないか。そんなにも簡単にそこに到達できるはずがない。」

と、言われる方もいらっしゃるに違いない。

だが、オウム真理教にはこのス

テージに到達した者が、わずか十一名とはいえ存在することは事実なのだ。もちろん、私が彼らを指導している。これからもこのステージに到達する者が増えていくだろう。

言うまでもなく、それは簡単に到達しうるステージではない。そして、その修行は、それ以前のヨーガ系の混じった修行に比べて、実に仏教的な修行となるのである。

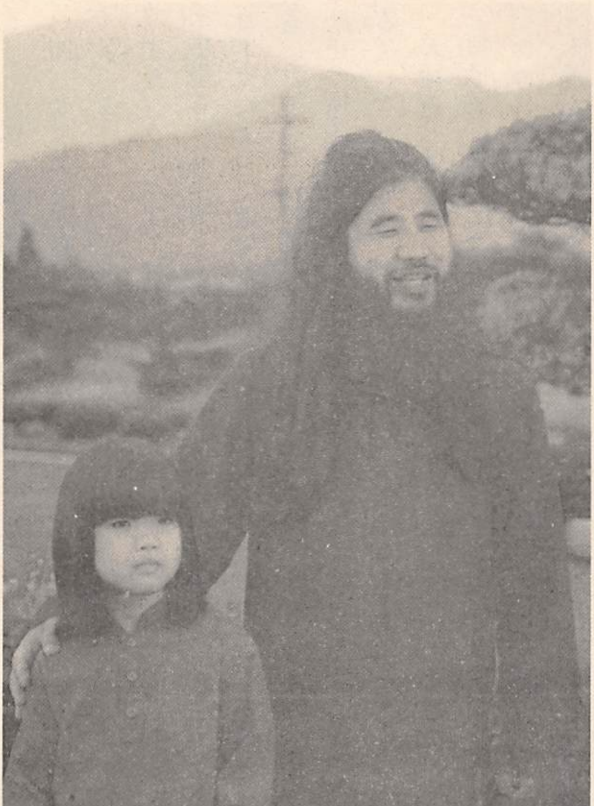
その修行によって彼らは無色界（ヨーガの言葉を使うならばコーザル世界）へと至る。そこでは、完全に煩悩が止滅した状態を得、個の完成を得るのである。

言葉を換えるならば、このときの四つのサマディ（三昧）を体験する。四つのサマディとは、

一、第一静慮＝有熟考にして有吟味。ここでは遠離・離貪からくる喜と楽を経験する。

二、第二静慮＝無熟考にして無吟味。ここではサマディからくる喜と楽を経験する。

三、第三静慮＝サマディからく



る喜と楽と経験する。

四、サマディからくる寂静に至る。

また、ラージャ・ヨーガによって獲得される三明、クンダリニー・ヨーガによって獲得される三明六通（六神通）もいよいよ深まりを見せ、神通力も本格的になってくる。

六神通とは、

・神足通（空中浮揚やテレポーテーションを行なったり、高い世界へ飛んだりすることのできる能力）

・天耳通（神々の声を聞いたり、遠くの声を聞いたりする能力）

・他心通（他人の心を知る能力）

・宿命通（前生を知る能力）

・天眼通（一般に遠隔透視能力といわれているが、これは北伝系仏教の間違いであって、実際には南伝仏教のいう死生智のこと。死生智とは転生先を知ったり、生きながらにしていろいろな世界とつながる能力）

・漏尽通（完全なる神の叡智）

という六つの神通力である。

そして、このステージに到達した後、オウム真理教では、自己の絶対的な平安という境地を破壊し、他の魂のために自ら苦悩の中に入っていくという大乗の修行が待っているのである。

こういうステージに到達する者が出ているということは、原始仏典にみられるサマディの各ステージ、神通力等が単なる夢物語ではなく、事実だったのだということの証明になることだろう。

なお、私とて釈迦牟尼のように、三千大世界にたった一人しかいないような真理勝者を目指して修行している身である。そして、それは全ての魂が絶対自由・絶対幸福、絶対歓喜の世界であるマハー・ニルヴァーナに入ることができるまで、続くことになるだろう。たとえ何カルパ、何万カルパ、何十万カルパ、何アサンキャとかかろうとも。

それでは、最後に在家の読者の皆さんのために、〝仏教的願望成就の法〟をご紹介しよう。

これは、仏教の七科三十七道品の中にある四つの如意足を使うのである。これは、本来は、本格的な瞑想修行ができるようにしていくための修行法なのだが、この世での願望を成就するための法にもなりうるのである。

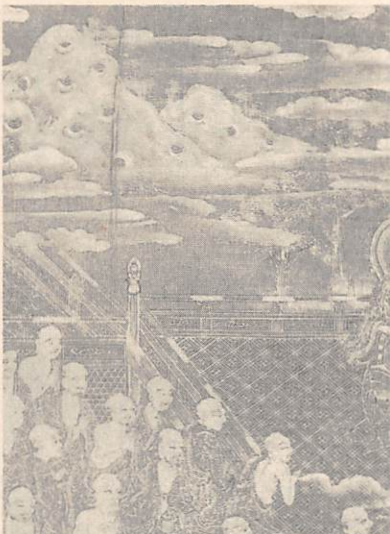
それでは、この四つの如意足がどうなっているかというと、

一、決意如意足

二、精進如意足



三、思念如意足
四、観慧如意足
という順番になっている。
まず第一の決意如意足では、自分は「これをします」という誓願を立て、これを日々百回、千回と唱え続け、その土台を固めるのである。
第二の精進如意足では、その決意にのっとり、善業を増大させ、悪業をやめる。これは未来においても同様である。
第三の思念如意足では、わたしはこれこれ、これこれ、これだけの修行をやっ



ているんだから、必ずこれこれの結果が出る、と思念し続ける。
そして四番目の観慧如意足では、対象を検討し、その検討したものを分析し、そしてそれを実践するということである。
これを例えば恋愛にあてはめてみよう。
「わたしは恋人が欲しい」あるいは「一年後には結婚したいんだ」と決意し、何回も繰り返し唱える。これが決意如意足に当たる。
そして、二番目には、例えば自分自身を分析し、悪いところをなくし、長所をのばして魅力的にしていく。もちろん背景には真理の実践がなければならない。これが精進如意足に当たる。
三番目には、自分自身にはこのように徳もそなわり、戒律も守り、真理を実践しているんだから、素晴らしい恋人が現われ、素晴らしい結婚をしても当然だと思念する。これが思念如意足である。
そして、四番目には、自分自身の性格を検討し、自分に合う人の

条件等の思索する。これが観慧如意足である。

この方法は、受験や仕事、人間関係にもあてはめて使うことができる。

このように、仏教というものは、解脱・悟りを得ることもできれば、現世的に幸福になることもできる素晴らしい真理の教えなのである。

そして、私をはじめとするオウム真理教の出家修行者や信徒は、日々この実践をしているのだということをご理解いただけたら幸いである。

なお、在家の信徒であっても、ラージャ・ヨーガの成就、クンダリニー・ヨーガの成就を得ることのできた人が存在しているということをつけ加えておく。つまり、オウム真理教のシステムが、このレベルまでの解脱・悟りを可能としているのである。

# 第4話

# アンチ宗教だった私が……




『十人十色』
1991年9月号より

本誌取材班は、真夏も盛りを迎えたある日、静岡県富士宮市にあるオウム真理教総本部に麻原彰晃氏を訪ねた。

総本部は富士の裾野にあるということから、自然環境の中にあるロケーションは想像できたが、そこは思った以上の田舎である。中央高速道路を河口湖インターで下り、国道139号線を車で走ること40分余り。観光地の喧噪から遠くはなれた原野の中に総本部はあった。

## ◉意外に明るい信徒たち。
### オウム真理教はなぜ若者達の心を掴むのか

お金が湯水のように入ってくるといわれる信仰宗教のイメージからは程遠く、油断していれば通りすぎてしまいそうな地味な建物である。ここ総本部は敷地面積550坪。150坪の道場を中心に、事務所や研究施設機能を果たす2つの建物が並んでいる。この総本部が完成したのは1988年8月のことだが、これら3つの建物は信徒達自身が



建設にあたったと聞き、少し驚く。建築期間4カ月、総工費は道場が4500万円。普通なら1億円は軽くかかるところを自前の工事で節約した。創世期の宗教団体に多学の予算などなかったのだろうが、並大抵の団結力ではできそうもないこと。

オウム真理教の信徒数は現在内弟子800名、在家信徒は5000人。国内に21カ所、海外に2カ所の本支部道場がある。信徒数は他の新興宗教に比べれば少ない感じがす

るものの、この数はいわゆる公称ではなく、きちんと会費を払って信徒になった人の実数だという。

信徒の表情は明るい。こちらの既成観念もあるのだが、ふつう新興宗教の信者達はどこか普通の人とは違った雰囲気、つまり何かに取憑かれたような暗い熱気が感じられるものだ。しかし、この取材に当たって接したオウム真理教の人々はごく普通の若者となんら変わりはなかったし、むしろ生きがいを感じて活動しているためか、いい顔をしている。巷間いわれてきたような「怖い」とか「狂気」といった印象は感じられなかった。

### ◉叩かれることなんか気にしない 試練が来世への幸福につながる

さていよいよ、教祖の部屋で麻原彰晃氏と対峙した。

鮮やかな紫色の僧衣を身につけた麻原氏は、目の前の白いソファーにアグラ（瞑想のポーズの一つ）をかいて座った。左側に麻原氏と共によくテレビなどに出演してい

た、高弟のマイトレーヤ正悟師（本名・上祐史浩）が座り、広報担当のミラレパ正悟師（本名・新実智光）らも同席する。マイトレーヤ正悟師は元宇宙開発事業団勤務。ミラレパ正悟師も前身は普通のサラリーマンで両師ともまだ20代後半の若者である。ちなみにこの取材に同席してはいなかったが、高弟のなかでも最も古くから麻原氏の教えを受けてきたマハー・ケイマ正大師こと石井久子さん（31）も、元は日産火災に勤務していたOL。麻原氏自身が今年36歳と若いこともあって、高弟達の年齢も20代後半から30代と若い力で固まっていること、そして、それまでの仕事を捨てて修行一筋に打ちこんできていることがオウム真理教のパワーの源泉であろう。目の当りにした麻原氏はトレードマークの背中までたらした長髪に髭といういでたちで、思ったより静かな口調ではあるが、時には身を乗り出しながら精力的に我々のインタビューに応じてくれた。信者の人々

にも感じたように「怖い」とか「狂気の」といった形容詞は麻原氏にも当てはまらない。それよりは時折みせる笑顔に何ともいえない愛敬があり、教祖に「可愛い」などというのは失礼なのだろうが、親しみやすさが先にたった。

まずオウム真理教がこれまで受けてきた中傷や批判を麻原氏はどう感じているのか。

「宗教というものは信じる人と信じない人がいるわけで、信じる人が実践すればいいと思っています。信じないという人にオウム真理教を理解してもらおうと思ってもそれは無理なこと。ですから報道などを通じていろいろ言われることはまったく気にしていません。それよりむしろ叩かれることがあってもそれはそれでいい。その試練を受けることによって、我々が現世で犯した業が落ちるんだと考えています」

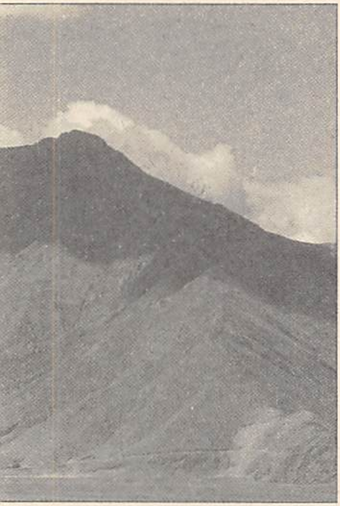
あれだけの中傷、非難を受ければ、世の中を恨んでも当たり前とも思うが、麻原氏の答えは意外に

もそんな次元をふっきっているようなのである。さらに氏が続ける。

### ◉私の仕事は原始仏教の伝導 これからが面白くなってくる

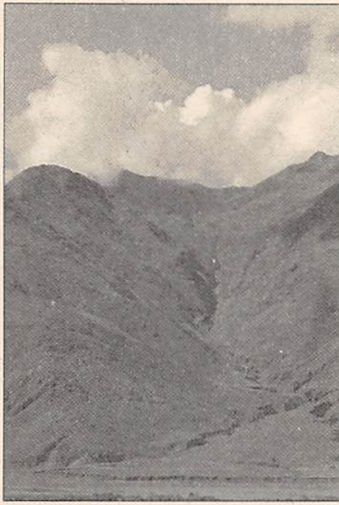
「そんなことより、私の本来の仕事は原始仏教の教えをいかに日本に広めるかということで、宗教家として縁の出来た人々に原始仏教にのっとった本当の道、本当の生き方、そして本当の世界観を話すのが生きがいなんです。今までとは違う真理の法則を我々は日本に持ちこんだわけですから、抵抗があるのは当たり前でしょう。だから社会の反応はそんなたいしたことじゃない。むしろその抵抗が静まってきた今、私が日々実践している教えが浸透していくのか否か。その動きに大変興味を持っています」

中京大学の池田教授によれば、オウム真理教は「戦後最大の弾圧を受けた宗教」だという。戦前にも大本教を始めとして、いわゆる信仰宗教には激しい弾圧が加えら



れた。いや、それだけではない。キリスト教などの世界的なメジャー宗教も、その初期には弾圧を加えられた歴史を振り返れば、およそ宗教と名のつくものはすべてなんらかの形の迫害、弾圧にあっているといって間違いない。それはオウム真理教に限らず、宗教というもののすべてが、世の中の根底を覆す力をもっていることに対する、社会の怖れの現れれでもある。

では、オウム真理教の場合はいったい何が世間に怖れられたというのか。麻原氏の言う「今までとは違う真理の法則」とは具体的にはどんなことなのか。我々はオウム真理教に対する一連の騒ぎばかりに注目しがちであったが、ここでオウム真理教の教えを改めて探ってみたい。



## ◉三一歳でインドへ渡り修行。ヒマラヤ山中で考えたこと、閃いたこと

オウム真理教の「オウム」という言葉は、もちろん鳥の鸚鵡からきているわけではない。「オウム」とは、宇宙の本質的な創造、維持、破壊という言葉を表したもの。すなわち「無常」を表しているという。

「無常」という概念は2500年前に釈迦が説いたものとして知られている。釈迦は言った。「人間は、自己が積んだカルマ（業）によって、さまざまな世界を輪廻転生するが、無常という法則はどこに転生しようとも逃れられない真理である」と。しかし、もし修行によって輪廻を超えられるなら、絶対に壊れない永遠の自由、幸福が得られ、これこそが最高の幸福、すな

わち「解脱」であると説いた。

## ◉31歳でインドに渡り、日本人として初の最終解脱に成功する

麻原彰晃氏は昭和61年31歳のときインドへ渡り、数々の聖者から教えを受け、厳しい修行に耐え、ついにヒマラヤ山中で独力で最終解脱の境地に達した。

以後多くの人々にこの解脱の境地を味わってもらおうと、原始仏教を土台として、あらゆる宗教とヨーガの本質を含んだ「法」を展開。これまでに242人の弟子を解脱に導いたという。

つまり、オウム真理教はうつろうことのない幸福を求める宗教。物質からも人からも得られない精神の充実を、修行によって自ら勝ち取ることを旨としている。それだけに修行は厳しく、道場での食事は菜食を中心としたメニューで一日一食。24時間集中して修行を続ける人もいる（ただし瞑想状態にはいるので、睡眠以上の休息が得られるという）。だが、原始仏教

ではごく当たり前とされたこんな修行も、現代社会では「やりすぎではないか」という非難につながったのだろう。

しかもオウム真理教は社会的に認知された仏教とは違って、あくまで新興宗教なのだから。

意外なことに、現代の「神様」として注目される麻原氏は「21歳の頃までアンチ宗教だった」という。

しかし、現夫人のヤソーダラー正悟師（現在は正大師）こと知子さんと劇的な出会いをして結婚した22歳の頃から、心の中に変化が起こり、次第に宗教にめざめていった。「私はどちらかというと自己開発のために宗教に入っていったんです。子供の頃から『死』に対する強い恐怖感があったことも影響して、この世は『苦しみ』ばかりだと思っていました。その『苦しみ』はどんなにお金があっても、素晴らしい家庭をもっても解決できない、自分の内面的問題であることが分かったとき、私は模索を

始めたんです。いったい何のために人は生きているのか。真の幸福はこの世に存在するのか。私はそれを手に入れることができるのかと。その回答をあらゆるものに求めたのです。」

昭和30年3月、熊本県に生まれた麻原氏は、生まれたときから目が悪く、小学校から高校までを盲学校で過ごした。学校を卒業してからは針灸師として活躍。すでにこの頃、針灸院を開いて患者の治療に当たっていた。だが、《いてもたってもいられない。そんな気持ちが昂じて、私の模索が始まった。強い思いであり、信仰だった。言うまでもなく、生活は一変してしまった。仕事などはそっちのけで、まず運命学に手をつけた。自分の運命をはっきり知ろうというわけである。それからというもの、私は『気学』『四柱推命』『断易』『六壬(りくじん)』『奇門遁甲(きもんとんこう)』・・・と運命学の研究に没頭した。これは何にでも一度はのめり込む性格によるところが大きい。しかし、それ

らは奥義まで究めたものの、期待していたほどの効果がないことを知ってがっかりしたのだった》(麻原彰晃著『生死を超える』オウム出版刊)と、精神世界へいっきに没入。以後、仙道、ヨーガと修行を続け、ついに原始仏教へとたどりついた。

そして、ヒマラヤ山中で最終解脱を遂げるまでには8年の歳月が流れた。その修行の過程として、麻原氏は「空中浮揚」「水中クンバカ」などの術を体得。これらは修行によって身につけた集中力を表すものだが、信者の中にはそんな術の神秘性に強くひきつけられ入信した若者も多い。

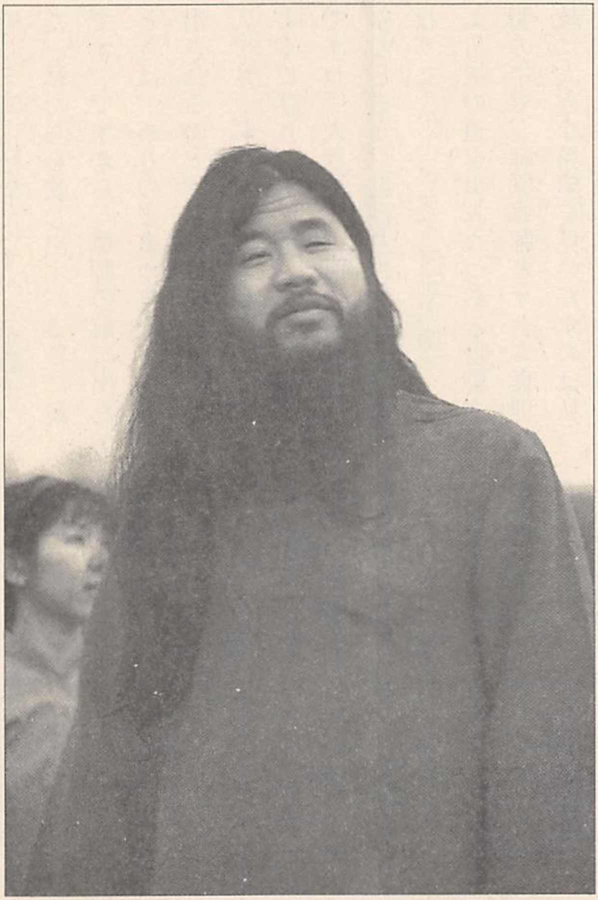
### ◉知的レベルの高い宗教家、最高の心の完成者という声もあって

宗教家という職業柄、そのプロフィールにはベールに包まれた部分もある麻原氏だが、少なくても会った印象と、これまでの修行の過程を振り返るなら本物の感じを強く持った。

考えてみれば、いろいろと叩かれるのは宗教家の宿命でもあり、人から悪口を言われないような当たらずさわらずの平凡な人間が多くの信徒を指導する教祖になれるわけはないのかもしれない。麻原氏自身「5000人も信者がいれば、中にはオウム真理教を悪く言うものが出てくるのは仕方ない」としている。逆に、中傷、非難ばかりがひとり歩きしたオウム真理教と麻原氏にも次のような声もあることを伝えておく。

《僕は彼がとても高度なことを考えている人で、高い意識状態を体験している人だと認めています。日本の今いるいろいろな宗教家のなかでも知性においてかなり上等なレベルにいる人だと思いました。今の日本で宗教をやっている人のなかで稀に見る素直な人なんじゃないかな》（宗教学者、中沢新一『週刊ポスト』1989年12月8日号）

《最高の心の完成者で、すべてを超越なさった方であるというのを



感じます。ほんとにすべてが静まった、私たちを映し出す、まさに鏡です。ですから、尊師の前に出たときは、ありのままの自分が映し出されるので、非常に楽を感ずるんです。私自身よりも私のことをよくご存じな、表現すれば「海」ですね。大きくて、何でも取り込んでしまう、包容力のある海ですね》（マハー・ケイマ正大師）

《自滅の道を歩みつつある物質文明の中で、麻原尊師とオウム真理教に大きな希望を見いだすのは私だけではないと思います。》（中川智正）

## ◉物質の豊かさだけでは本当の幸福は得られない。どうすればいいか

《ヨーガの修行を基本とする集団が俗世と関わるのは、世界で初めての試みかもしれないが、人々を救おうという願いに端を発し、そのための具体的な行動システムを提案されているのは、麻原彰晃尊師しかいないのではないだろうか》（小平武・北海道大学教授）

《オウム真理教に入信して、自分の性格を冷静に見つめることができるようになり、自分を縛りつけていたものが取れて、会社での人間関係がとても良くなりました》（宮沢恭一・信者）
《高校生のとき、入信するまではパッとしない成績でしたが、行法を行い初めてから集中力がつき始め、短い時間でたくさんのことを覚えることができるようになりました》（溝口博文・信者）
麻原氏の実践する教えは現代文明に警鐘を与えようとしている点にある。
「私は経済や科学の発達を否定しようとしているのではありません。ただ、現代の社会では知性は進歩していますが、人間の欲望も際限なく膨らんでいる。物質を得ることで心の平安が得られるなら問題はありませんが、それによって不幸になるようでは困るわけです」
だから、もう一度原始社会がそうだった、物はなくても精神的に充実した境地を現代社会の生活に

とり入れてどうかというのである。

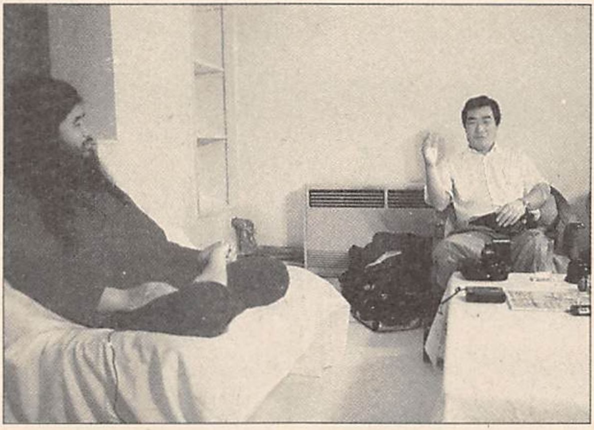
だが、逆にそんな麻原氏の教えが、「社会を根底から覆すものとして怖れられているのではないか」とも。現代文明にドップリと浸かっている記者にとっては、考えさせられる発言ではあった。

## ◉たとえ病気、試練に襲われても生きているって素晴しいことだ

最後に麻原氏の「死」に対する考え方が非常に興味あるものなので、ここに再現してみたい。

「私には『死』というものはありません。もちろんいつか私の肉体は朽ち果てるでしょうが、私の意識は永遠であるからです。しかしながら、もっと修行、布教をするために、私はできるだけ長生きしたい。せっかくこの世に生まれたのですから、いろんな体験をし、自分の生き方を全うするなら、できるだけ長く生きたいと考えています」

——しかし、長く生きたために、たとえば田中角栄のように晩節を



汚す人もいますが・・・
「私はそんな人たちが晩節を汚しているとは思いません。たとえ、晩節を汚している人がいたとしても、その人たちはこれまでの人生のツケを返すために生きているんです。それは業を払うことでもあり、来世の幸福を呼ぶためでもある。だから、生きていること自体が、すごく意味のあることなんです」

## 第5話

# 修行で人間は進化する




『Mジャパン』

1991年12月号より

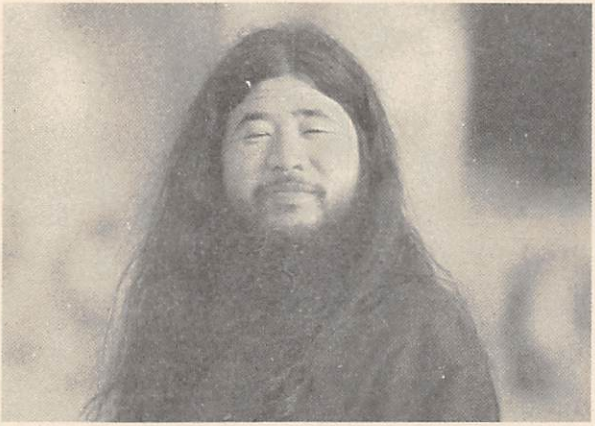
インタビュー・文＝李 春成

（ウーマンズ・ウェア・ディリー・ジャパン社／流行通信社）

富士五湖周辺は、平日でも観光客で賑わっていた。瀟洒な入口を設けたゴルフ場や、ホルスタインがのんびりと草を食む風景がしばらく続いたあと、目標の建物は、さらにその先の、細い田舎道を抜けたところにあった。ほんのりと色づき始めた原野に建つ、その白い建物こそ、なにかと話題を提供する、オウム真理教の総本部である。

弟子たちの手で建てられたという3棟の建物は、どこにでもあるような素朴なビルだった。しかしこの中では、出家した弟子たちが約400人も朝夕ともに暮らしているという。ちょっとした異次元空間だ。住所は静岡県富士宮市人穴381-1、人穴とはあまりにもゴロがよい。

弟子たちに案内されたインタビュールームは白く、ひどく殺風景だった。そして麻原尊師は、中央に用意された大きな肘掛け椅子の中にドカリと胡座をかき、取材陣の到着を静かに待っていた。



——肉体はカルマの幻影であり、借り物にすぎないという麻原さんのお考えはよく分かります。だけどぼくらのような俗の世界の人間からすると、麻原さんのお考えに到達し、理解するまでには、かなりの距離があると思うんです。もっと麻原さんの身近なところから、人間像だとか素顔の部分から知ることができれば、オウム真理教を理解するうえでの導入部としても分かりやすくなると思うんですが。

**麻原**　人間が進化していく過程を

蝶にたとえてみましょう。卵から幼虫になり、幼虫からサナギになり、そして孵化して成虫になるというプロセスがあります。その場合、卵や幼虫を表面に出すことが、教団にとって、はたしていいのかどうかという難しい問題がありま す。つまりアオムシを綺麗だという人は少ない。蝶を綺麗だという人は多い。蝶になるまでの過程は、たしかに読み物としては面白いかも知れません。アオムシにはアオムシの、悪戦苦闘した時期がありますし、サナギにはサナギの、じっと耐えなきゃならないという時の流れがあるからです。しかし教団の活動の概要というのは、私たちが実践している原始仏教とか原始ヨーガを、いかに日本に広めるかということが狙いなのです。ですから、それにとってプラスになることはやりますが、マイナスなことは当然やりません。そしたらアオムシやサナギよりも、蝶のほうが綺麗だと思うんですね。

――つまりその蝶とは、修行後の

麻原さんを指しているわけですね。それは麻原さんのお考えなのですか。それとも教団のお考えですか。

**麻原**　私自身は何を出してもらっても構わないわけです。ところが教団の中にもあるプロパガンダ部門や出版部門の活動の狙いは何かというと、やはり多くの人に実践してもらいたいという一点に集約されると思うんですね。ですからオウム真理教の立場としては、私の過去についてはできるだけ出さない。また過去の部分は、俗に属する部分でもありますから、あまり表面に出してもしょうがないんです。なぜなら修行に入るまでの時期はどうでもよくて、修行に入ってからどう変化したのかということのほうが大事だからです。修行でどう解脱し、そのあとどう生きていくのか。そのことのほうが、はるかに大事なことなんですね。

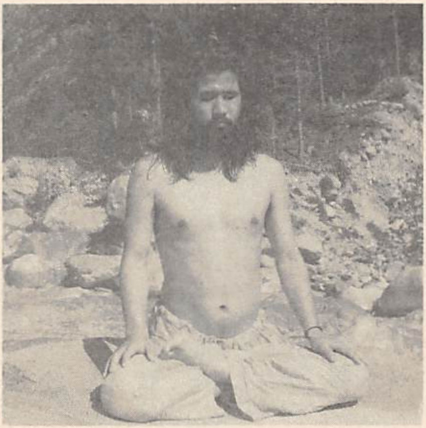
――でもそれはケースバイケースで、俗人が麻原像を正確に把握するためには、修行前のお話も大切だと思うんですが。

麻原　得体の知れない部分があったほうが面白いじゃないですか(笑)。それにいまの私は、修行前の私からは収穫できない内容なんですね。なぜなら、まったく別の人格を作り上げていくというのが修行だからです。それが解脱になるわけです。

手塚治のマンガに『ブッダ』という作品がある。ブッダのヒューマン・ストーリーに感銘を受けながら、自然に仏教の仕組みを知ることができるという面白便利なマンガだった。麻原尊師についても同じような描き方をしてみたかったのだが、この試みはまんまと失敗した。そこで、ここで麻原尊師のプロフィールについて簡単にふれておこう。

ある雑誌によれば、麻原氏は熊本県生まれ、今年で36歳になるということだが、原則的には、本名も年齢も出身地も不詳になっている。国籍不明の覆面プロレスラーのようなものである。

77年ごろまでの麻原氏の職業は



鍼灸師だった。治療のために通院する人たちからの信頼も厚く、仕事はごく順調だったという。しかしいつのころからか、「自分は何をするために生きているのだろうか」と、漠然とした不安に悩まされるようになる。生まれながらにして目を患っていただけに、その思いは、普通の人間以上に強烈だったのかも知れない。

　まず、自分の運命を解明しようと〈気学〉〈四柱推命〉〈奇門遁甲〉など、いろいろな運命学を研究し始める。ちなみに〈四柱推命〉による尊師の運命は「破格」の相だという。そして〈仙道〉の修行からは、

**超能力を獲得するきっかけをつかむ。そうして身につけた超能力の一つが、85年に初体験した空中浮揚である。翌年にはインドへ渡り、ヒマラヤの山中で最終解脱の境地にも達した。**

——初めて幽体離脱を経験したのは、3歳のころだったとうかがっていますが、しょっちゅう経験していたのですか。

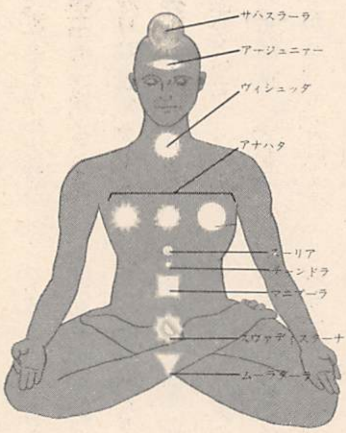
**麻原**　しょっちゅうです。しかし3歳のときの経験は、幽体離脱というよりも、魂が抜けたという感じでしたね。幽体離脱の場合は一種の夢で、だいたい形があります。しかしそのときは、自分はあっても、形がなかった。つまり意識だけが抜け出している状態だったんです。

——でも3歳のときの記憶というのは、ふつうはあまり残っていないものですよね。

**麻原**　私の場合は、母親のお腹のなかに自分がどのように入っていたかというところまで覚えていますから、その意味では、3歳のころの経験を覚えていないほうがお

かしいんです。

幽体離脱と変化身（へんげしん）のちがいは、どのチァクラから抜け出すかということですね。チァクラとは、人間の体にある霊的なセンターで、超能力を使うときに必要な場所です。下から上まで数えて、誰にでも七つのチァクラがありまして、



チァクラ図

そのなかの下の部分から抜け出す身体（しんたい）を幽体といってます。化身というのは必ず頭頂のチャクラから抜け出す。あるいはお腹のチャクラから抜け出す。その二つのパターンしかないわけです。

――チャクラの開発は誰にでもできるものなんですか。

**麻原**　もちろん誰にでもできます。私は初め、チャクラを知らなかったんです。それよりも〈三昧（さんまい）〉という、人間が絶対的境地に達するまでの段階に対して興味を示したんです。〈三昧〉とは、体が自分ではない。あるいは感覚や経験が自分ではない。それを観念的に捉えるのではなくて、瞑想によって、自己の本質に還ることを意味します。

――「自分ではない」とは、どういうことですか。

**麻原**　肉体は父母の性的な交わりによってでき上がったもので、父母と自分との関係というのは、肉体を通してでしかないわけですよね。すると、この肉体が生まれ、

成長し、老いて死んでいくと、死んでいった段階で、私はこの肉体から当然離れていくわけです。そうすると、この肉体が自分のものなのか、それとも自分のものじゃないのかっていうことが分かりますね。すなわち仮りのものであるわけです。同じように感覚も、お酒に酔っ払ってるときというのは痛みが分からない。しかしお酒から覚めたときに、いきなり痛みが出てきます。ようするに感覚そのものも、自分自身ではないということです。イメージにしてもそうです。最終的にはすべて経験というものを土台にして発生していますから、経験を止めてしまったらどうなるか。たとえば小さな子どもは転んでも泣かないけれど、大人に「痛いでしょ？」っていわれているうちに泣くようになる。つまり経験を越えた状態ですべての現象を見ると、すべてが新しく見える。そこには本当の意味での自分の身体や感覚が存在しており、そこで初めて自己の本質に迫るこ

とができるんです。

私の場合は凝り性ですから、一つの道だけを歩くのではなく、一つの道に到達したら、次は別の角度から同じ修行をやってみようと続けてきました。そうして自分の内側に確信をもつことによって、まわりの人にも、各人に合った修行法を伝授していく。それを分かりやすく解き明かしてやることが、私のつとめだと思っています。

——同じタイプの修行をやっている宗教団体はあるんですか。

**麻原**　まずないと思いますね。仏教経典の翻訳の仕方にしろ、おそらくオウム真理教で出している出版物が最高でしょう。日本の仏教学者の方たちにも認めてもらっています。

——いままでの仏教経典は、誰にでも分かりやすく翻訳されていないのですか。

**麻原**　翻訳されていませんね。直さないほうがありがたいという発想があるんじゃないですかね。

——一般庶民から遠くかけ離れた

存在におくことによって、お坊さんのステイタスを守りたいということですか。

**麻原**　おそらくそうでしょうね。ところがあの教えというのは、読むためのものではなく、実践するためのお話なんです。ですからそのお話を、いまの日本人にも分かるような言葉に書き換えなきゃマズいと思うんですね。それがオウム真理教のなしている大きな事業の一つだと思います。

たとえば先ほどの〈三昧〉は、サンスクリット語の〈サマディ〉を音写漢訳したものなんです。じっさいには〈三昧〉というのはどこにもなくて、〈サマディ〉が正しいんです。〈僧莎訶（そわか）〉もそうですね。これは日本の仏教徒がそういっているだけであって、本当は〈スワハー〉というんです。

——読み方のちがいというのは、そんなに大事なことなんですか。

**麻原**　たとえば〈ツクシ〉という言葉を〈ツクエ〉といったら、全然意味がちがいますよね。

――でも言葉というのは一種の記号ですよね。それを〈サマディ〉だとか〈スワハー〉だとか、ふだん使い馴れていない記号を使われると、かえって分かりづらくなるのでは。

**麻原**　日本語にない概念もあるんですよ。〈サマディ〉は「死」という意味に置き換えることもできるんですが、それだけではないんです。〈スワハー〉にしても、アグニ神というインドの神様に祈るときに、この言葉を使う。なのに、それが〈僧莎訶〉になってしまっては通じなくなってしまうんですね。いったん中国語に置き換えられたものが、次には日本語に置き換えられた。二重にわかりにくく





なってしまってるんですね。

――いま第3次宗教ブームといわれていますが、宗教のもつ側面には怖さもあります。たとえば宗教戦争は、領地を奪い取っただけで終わりではなく、相手の血を根絶やしにしようとさえすることもありますよね。

**麻原**　インドで仏教がすたれた理由の一つは、仏教はすごく綺麗だからなんですね。ですから仏教にとって聖戦というのはなかったし、これからも存在しないだろうと思います。しかし好戦的な宗教もこの世の中にあっていいわけですから、その場合は、同じようなタイプの宗教同士が闘うっていうことも存在するでしょうね。

――日本においてはどうですか。

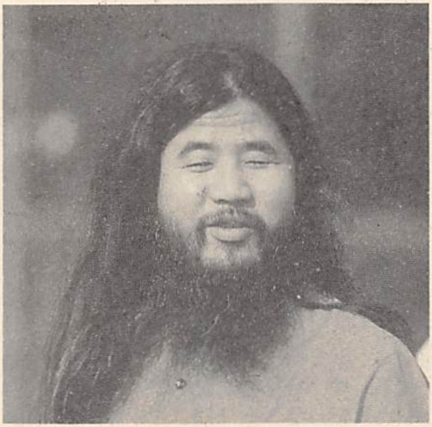
**麻原**　日本においても、それは存在すると思いますね。

――それは怖いですね。

**麻原**　怖いですけども、最後は徳だと考えておりますから。たとえば釈迦牟尼の時代にもいろいろな宗教があり、そういった闘争的な宗教もあったでしょう。しかし、やはり釈迦牟尼の法が広まったわけだし、最後には徳だと思うんですね。だから人が積めないような徳を積んでいけば、人は誰からも攻撃されなくてすむんじゃないでしょうか。

――でもそのあいだに何人もの人が死んだり、不幸になったりするのでは。

**麻原**　いまこの瞬間にも、多くの人が事故に遭い亡くなっています。多くの人が病気で亡くなってもいます。けっきょくそれが人の限界であり、運命であると思うわけですね。ですからそれを越えるような意識状態を早くつくって欲しいと思います。肉体にこだわって一



○○年生きたとしても、死ぬときはやはり苦しい。死ぬ瞬間を考えたら変わらないんですね。

宗教で人が殺されるとか、宗教によって人がダメになるとか、いろんな逆の宣伝がなされるわけですが、宗教がなくたって戦争はしてますし、宗教がなくたって薬物や文化などによって堕落していますよね。ですから宗教を特別なものとして考える理由はどこにもないんです。短いタイムスパンの人生で、もう少し長めにモノを見たらどうだろう。そうすると、行き当たるべき考えが出てくるのではないか。私は、そこが宗教じゃな

いかと思うんです。

——麻原さんのスタンスで世の中を眺めるには、あまりに世の中が忙しすぎると思いますが。

**麻原**　スタンスさえ変えなければ、まわりがどれだけ早く動いていても、影響されないんじゃないでしょうか。たとえばマイケル・ジャクソンも、2週間、3週間と瞑想を行なっていますよね。この忙しい時代に、それだけの期間一人で瞑想に耽るというのは、ふつうでは考えられないことです。しかし彼の収入は高額です。それは彼が、現代人が使っていない特別なテクニックを使っているからじゃないかと思うんです。

——オウム真理教は、原始仏教、原始ヨーガをベースにしていますが、他の宗教に比べて、仏教をどのようにして位置付けていますか?

**麻原**　仏教はいかなる宗教をも包含したまさしくただひとつの道だということです。誤解を恐れずに言えば、キリスト教、ヒンドゥー教、イスラム教などは深みという

点で仏教に及びません。いずれも仏教に至るまでの過程にすぎない。

――ところで、大川隆法氏の「幸福の科学」についてはどう思われますか?

**麻原**　ほかの宗教については、本当はあんまり興味がないんです。それよりも仏典を正確に訳したり、読んでいただくことのほうが興味があるんです。ところが大川隆法さんの「幸福の科学」については、外道であることはまちがいないでしょう。釈迦牟尼が説いた真理の教えがねじ曲げられているわけですから、やはり、このまま放置しておくわけにはいかないと思います。

私はこれまで、宇宙が何千回も何万回も何十万回も破壊される以前から、いろいろな経典の学習と瞑想修行を続けてきました。だから日本で大川さんの教えを正しく分析し、修正を加えることができるのは、おそらくこの私しかいないんじゃないかと考えているんです。

麻原尊師がこれまで経験してき

た生（しょう）には、人間の生もいくつかあったが、天界の生のほうが多かったのだと、彼は自信満々の顔をして、そういうのだった。9月、麻原尊師は、『幸福の科学の会員よ聞きなさい！ 真実の仏陀の教えはこうだ！』という新刊をオウム出版より刊行した。その前書きには、こうある。

《オウム真理教バッシングのこの二年間に急成長した幸福の科学なる教団の実体を知った以上、ここでペンを執らざるを得ないのである。それは、幸福の科学を今実践している人たちの来世が地獄であるということを確信したからである。（中略）大川隆法氏の教えは、その一つ一つが浅薄なのだ。つまり、薄っぺらで、単なる人の著作の受け売りであると言わざるを得ない》

約1時間半にわたる〝講義〟を終えた麻原尊師は、すっかり疲れた様子で立ち上がった。目の不自由な彼に、可憐（かれん）な少女が駆け寄って、自分の肩を杖がわりに貸す。

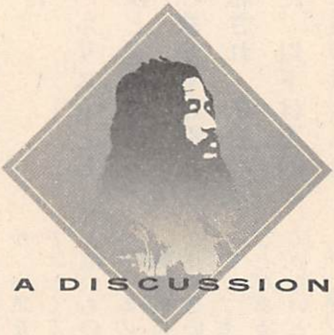
彼女は麻原氏の三女、8歳にもかかわらず、弟子達のなかではかなり高いステージに達した高弟の一人だ。麻原尊師は、夕闇迫る富士の原野に先導され、ベンツに乗り込んだ。ここからさらに10分ほど上ったところに、彼が寝泊まりしている場所があるのだという。

尊師を乗せた沼津ナンバーの白いベンツが静かに走り去り、一瞬の静寂が支配した。我々はその轍をぼんやりと眺めるだけだった。



第６話

# 精神世界を経典・科学で裏づける




『朝まで生テレビ』

1991年9月28日生放映より

一九九一年九月二十八日、『朝まで生テレビ』(テレビ朝日)で〝宗教〟を話題にした熱い論議が繰り広げられました。

宗教団体からのパネリストとしては、オウム真理教と幸福の科学が出席。オウム真理教からは教祖麻原尊師自らが出席され、仏教理論を展開されました。以下はそのときの経典・科学に裏づけられたオウム真理教の発言部分の集約です。

今日は、今、大変若者たちの間でブームとなっております、〝新・新興宗教〟について取り上げてみたいと思います。

昔と違いまして、例えば貧しさからとか、病気を治してほしいからということではなくて、豊かな時代の中に何かもっと高いものを求めてという、ちょっと違うブームのような気がします。

経済的に豊かで、平和な日本の若者が、なぜ新しい宗教団体にどんどん入っていくのか、その背景にはいったいどういうことがあるのか、このことについて調べてみたいと思います。

チャネリングですとか、オカルトとか、超常現象とかそういったものに若者たちが関心を示していますけれども、これも宗教ブームと無縁ではないのかもしれません。

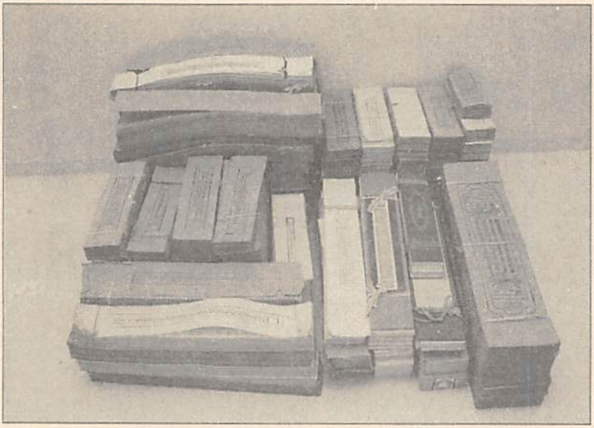
## ◉オウム真理教の概要

――まず最初に、オウム真理教の概要をお話しいただけますか。

（マイトレーヤ正悟師）オウム真理教は、原始仏教をベースに、密教・ヨーガを加えた教義を持ち、富士山総本部をはじめとし、全国各地に二十近い支部・連絡所、海外二カ国に支部を持っております。代表者は麻原彰晃尊師で、約八年に及ぶ激しい修行の末、一九八六年、ヒマラヤで最終解脱を果たされました。

オウム真理教の特徴の一つは、経典研究にあります。というのは、宗教において教義は命であり、仏教団体にとってはできるだけ仏教開祖の釈迦牟尼（サキャ神賢）の教えを正確に伝えている経典を収集し、正確に翻訳することが必要不可欠だと考えているからです。

チベット密教で有名なチベットの仏典『チベット大蔵経』、それから、釈迦の最初期の教えを純粋



に伝える唯一不可欠の経典とされていますパーリ仏典、および『南伝大蔵経』。それからまた、世界中のいろいろな聖者の方々が著わした英語の経典ですね、そういったものを可能な限り収集しております。

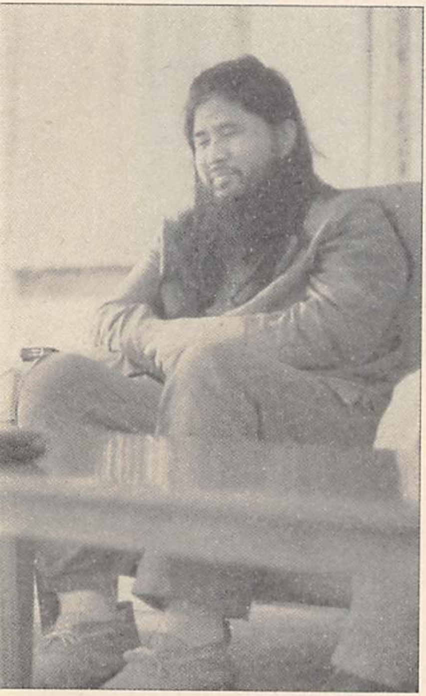
この膨大な経典を、できるだけ迅速に翻訳するために特別チームが組まれておりまして、例えば自動翻訳や、その他のコンピュータ処理などといった現代技術を取り入れて、迅速に、大量に、正確に



翻訳し、内容を把握しようと。で、こうして訳された経典は、いろいろな形で、一般の方々、そして信徒の方々に提供されています。もちろん、書店に書籍として並び、そしてオウム真理教の支部活動等で、尊師の説法、その他成就者の説法の中で現わされます。

オウム真理教では、多くの方々に真理を知っていただくために、説法会の中でも最大の、衛星中継で全国各支部を結んで行なわれる大説法祭というイベント、それか

ら、歌と舞踏によって経典の内容を表わそうとする、できるだけわかりやすく経典の内容を皆さんに知っていただきたいという意図から、ダンス・オペレッタという試みなどを行なっています。また、



経典の内容を、アニメーションで表わしたりしているわけですが、このようなダンス・オペレッタ、それからアニメーションなどはすべて、オウム真理教の出家修行者、尊師の弟子が自主的に製作してお

ります。
　このように経典を正確に把握した上で、さらに、現代において仏陀の教えを体現した人々との交流を行なっております。代表的な方が、まずチベット仏教の総帥、ダライ・ラマ法王で、法王は、「尊師と会うのが大変楽しみで、尊師は非常に厳しい修行をされている」というふうに語られています。そして、ダライ・ラマ法王とも関係の深いチベットの高僧、カムトゥー



ル・リンポチェ師。この方ともかなり深い交流がございまして、経典翻訳に関しても協力させていただいております。

また、富士山総本部道場での交流もあった、チベット密教、カギュ派の総師カール・リンポチェ師(故人)。このようなチベットの方々に加えて、インド、ヒマラヤの、スワミ・アカンダナンダなどをはじめとする、インド・ヨーガの成就者の方々とも交流をしております。

そして、南伝仏教――南を伝わって来た仏教ですが――南伝の仏教を、国を挙げてしっかりと守り続けているラオスの高僧の方々との交流もあります。このように、国を挙げて仏教をしっかりと行じている方々、特に高僧の方々とお会いし、経典、および体験に基づいた交流をし、そして真理の探求をしています。ラオスの出家した青年僧を集めた仏教学校での尊師説法など、ラオスだけではなく、海外支部のあるところなど、海外に

おいても布教活動を行なっております。

オウム真理教は、チベット、それからインド、そしてラオス、タイ、その他の伝統的な仏教国と同様に、出家制度を取り入れております。もちろん、この出家者というのは、多くの在家信徒の中から輩出されていきます。ダライ・ラマ法王ご自身も出家修行者でして、出家について、釈迦牟尼も出家をし、出家というものが、涅槃・悟りに至るためには最高の修行法であると語られています。で、オウム真理教の出家修行者は、基本的に、先程申し上げた経典、膨大な経典をしっかりと学び、記憶するということが課せられています。

仏教の修行において身につくといわれている神通力、例えば空中浮揚というものや、水中に潜り、深い瞑想状態に入って心臓や呼吸を停止していく、水中クンバカという状態があるんですが、そのような超常的な、俗にいう超能力——我々は、それよりも素晴らしい

ものとして神通力と呼んでおるんですが――そういったものも実証しています。

### ◉オウム真理教の教義の奥深さ

――なんか、偉い仏教のお坊さんに会ったとか、ＰＲにしか聞こえてこないような気もするんですが……。

（尊師）これはすごく重要なところで、オウム真理教の教義の内容は、簡単には説明できないということですね。どういうことかというと、オウム真理教の教義というのは、要するに、日めくり的な教義ではなく、ずっと積み上げていく段階があまりに高すぎると。で、それをいきなり説明したとしても皆さんにはおわかりできないだろうから、活動内容を説明するということにとどめさせていただいたと。まずこれが立場としてあるわけです。

次に例えば、オウム真理教の教えにおいて、例えば「愛」という




言葉があると。で、この愛というのは、例えば幸福の科学さんでは、与える愛イコール、父母が与える愛だとおっしゃってらっしゃるけど、『聖書事典』においても、キリストの説く愛というのは、父母の愛でもなければ、あるいは兄弟の愛でもなければ、あるいは友人の愛でもないと。そういう愛ではないんだということをはっきりいっています。

ということは、愛についてはどのように説明すればいいのかとい

う、次はテクニックの問題になるわけですけども、それについては、一応煩悩を滅尽した後に、すべての衆生(しゅじょう)に対して、本当に高い世界へ転生していただくためのただ一つの心の働き、これが慈愛であると。これは仏典の解釈でもありますし、あるいはイエス・キリストが説いた解釈でもあるわけです。

しかし、そういうのをいちいち説明したとしても、なかなかおわかりにならないだろうから、こちらとしては、オウム真理教の教団としての意味合いを説明させていただいただけなわけですね。

（マイトレーヤ）オウム真理教が、教えに関して詳しく説明せずに、活動内容を説明したもう一つの理由というのは、教えが難しい、広範であるというだけではなくて、我々が行なっているのは、〝新新宗教団体〟といわれていて、団体としては新しいわけですが、教えとしては、釈迦牟尼の原始の教えとインドの原始の教えということであって、それを忠実に再現した

いということです。

で、真理は一つなんだという考え方も出てくるわけです。だから、例えばいろいろな真理があってですね、ごちゃ混ぜになって新しいものができて、新しいものと古いものとの闘いがあるというのは、真理が一つであるという考え方と違うんですね。

わたしが申し上げたいのは、なぜオウムの教えなのか、どういうのがオウムの教えなのかとか、それから新しい宗教と古い宗教のぶつかり合い、それで新しい宗教が乗り越えていくというような考え方をオウムはとっていないと。宗教団体としては新しいが、教えは最古からの釈迦牟尼の教えをそのまま伝承して忠実にやっていきたいということです。

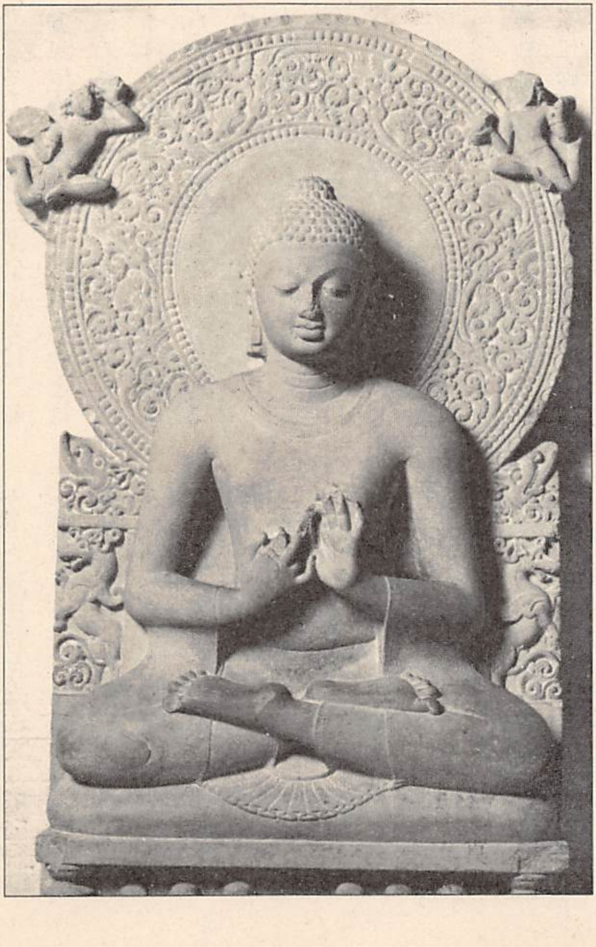
それからもう一つ、宗教団体というのと教え、または信仰というのは違う、これは確かだと思います。だから、今日のテーマは新新宗教というテーマですけど、それが宗教団体を指すのだったら、確

かにオウム真理教も新しい宗教なわけです。しかし、宗教、教えということをとれば、我々は仏教ですから、仏弟子ですから、二千五百年前からありましたし、その前の流れもずーっと仏教は引き続いて持っていますので、何も新しくはないと思います。

## ◉昔からの仏教ではいけない理由

──それでは、なぜ昔からの仏教ではいけないんですか。

（尊師）まず、釈迦牟尼は仏教を説いていないと、結論からいうならば。真理を説いたと。それは、オウム真理教という名前を見ていただいたらわかるとおり、オウムというのは、サンスクリット語で無常──創造・維持・破壊という無常を表わします。そして、初転法輪、つまり釈迦牟尼がお悟りになって、一番初めにお説きになったときに、サッチャ、つまり真理をお説きになっていらっしゃるわけです。



（マイトレーヤ）　逆にいえば、釈迦牟尼は、自分の宗教を仏教とはいわなかった。それは、後の人がつけたわけです。最初に彼が作った言葉は「真理」だということです。

（尊師）　そういう意味です。ですから、オウム真理教なんです。

——昔から延々といろいろある、仏教とかチベット密教とかそういうものではなくて、なぜオウム真理教でなければいけないのかという、新しくつくらなければならなかった理由は何なんですか。

麻原さんが、今までの宗教は駄目なんだと、ここでやっぱりオウム真理教をつくらなければいけないんだとお思いになったのはどこですか。何が足りないんですか。

（尊師）　それは、わたしが未来際においてマイトレーヤ（弥勒菩薩）として転生する魂だからです。それから次に、そのためには、まず日本に仏典を完全な形で残さなければならないからです。この二つの理由です。もちろん、今まで日

本に難しい仏典はありましたけども、それは仏教経典全体では、まずありません。

――では、率直にうかがいたんですけれども、空海とか、親鸞とか、法然とか、ああいう方はかなりレベルの低い人なんでしょうか。

（尊師）レベルが高い低いではなくて、彼らのお残しになった経典というのはほんの一部だということです、仏教の。つまり、仏典というのはものすごく膨大にありまして、その一部しかお説きにならなかったということです。

## ◉魔境から最終ステージへ

――例えば、チャネリングとかいったことは、どういったレベルなんでしょうか。

（尊師）この中で、チャネラーはおそらくわたし一人だと思うんですよ。というのは、わたしは〝魔境〟※のときにチャネラーになりましたから、実際に。で、もともとチャネラーというのは魔境なんで

※魔境とは、精神的な修行の段階の中で通る魔の境地。下位アストラル世界と通じ、肉体的・精神的に変調をきたすこと。肉体的な修行のみが進み、精神的な修行がそれに追いつかない場合や修行者に功徳がない場合に入る。

すね、あれは。
実際、わたしにも今から十数年前に起きまして、ただわたしはそれを魔境だと知っていたわけですね。これは前生の記憶もそうですし、それから今生で学んだこともそうですけども、そこに引っかかってはならないと。
ですから、わたしはチャネリングそのものを最終段階ではないということを知っていましたので、今まで著わしていません。しかし、例えばお聞きになりたければ、わたしにシャンバラのドゥンガーという人がのりうつったことがあるわけですけど――これは六年か七年前にとったものですけども――それをテープとしてとってありますので、お聞かせしても構いません、それは。
――では、最終的な仏教の道筋みたいなものはどのようなものなんでしょうか。
(尊師) まず、例えば、幸福の科学の方が、公園にゴミが落ちていて拾うということが大事だとかおっ

しゃっていましたが、そういうことは当たり前のことであると。言い方を換えれば、それはもう宗教ではなく、道徳であると。

宗教というのは、例えばステップにおいて四つのステップがあるわけですね。仏教的トライというのは、まず徳を積むこと、善を行なうこと、そして寂止、心を静めること、それから法則にのっとった修行を行なうこと、この四つの修行法があるわけですけども、その単なる一番下の善行、これが要するに公園でゴミを拾うことと。

で、その上に、まあいろいろ、神に対しての献身、あるいはグルに対する献身があり、これは徳を積むことであると。で、その上にくる寂止の行というのは、心を静めて、完全に心を止めてしまうことと。これは第三段階の寂止の行と。

で、第四段階の法則の行というのは、まあ、幸福の科学の方は二十次元とおっしゃっていましたが、実際は二十七次元プラス一という

のが仏教的な見解なんですけど、その一つ一つの世界に自分自身が自分の意識を持って行き、そこの世界を経験すると。で、帰ってくると。つまり、チャネリングというのは、上のものが下に降りて上の話をするわけですけども、そうではなくて、実際に上の世界に行って帰ってくると。これが法則の修行なわけですよね。で、その上の世界に実際行って、自分で見て経験してこないと語れないんじゃないかというのが、わたしの今の立場なんですよ。



――チャネリングで降りてくる神というのは高次元なんですか。

宇宙は、この現象界、そしてアストラル世界、コーザル世界という三界に分けられます。で、アストラルというのは、ヴァイブレーションの世界です。ところが、解脱というのは、アストラルの上にもう一つコーザルというのがありまして、そのコーザルの上にマハー・ボーディ・ニルヴァーナという大完全煩悩破壊界というのが存在しているわけです。

ですから、そのアストラルの神



というのは低次元の神だと定義されているんです、仏教でもこれは。

## ◉神の定義

――その神というのを定義していただけますか。

（尊師）まず神という定義ですけども、これは実在している魂であると。

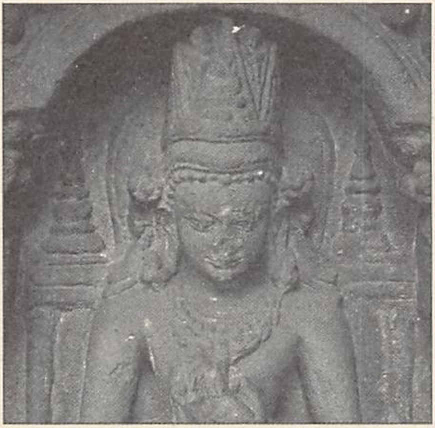
幸福の科学ではこれを霊団と呼んでいらっしゃるみたいですけど、ただその定義において、例えばその世界観の定義、それからその世界に住んでいる、その神の定義、それから神の形状、それからもう一つ、わたしたちは、意識は一つだと普通は意識していますけど、そうではなくて、例えば第七形状界ぐらいに入りますと五百ぐらいの意識に分離しますし、それからもっと高い世界に入りますと、二千、五千、一万、そして無数へと進化していくわけですね。この意識の分化というのは、例えばある人が、まあある魂が進化した段階

で、瞬間的に、無数の意識をいろんなところにいろんな形で飛ばすことができると。そこから考えるならば、きちんとした形での神というのは存在すると。ただ、そこへ到達するプロセスというのは、あくまでも自分を中心として内側へアプローチしていくということだと思います。

――人間は、神に近づきたい、あるいは神になりたいという願望から宗教をやるんでしょうか。

**（尊師）**いや、仏教は、神に近づきたいというのではなくて、神すら無常なんだ、つまり死ぬんだと、よって神を超えなさいと、絶対的な境地である絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜を得なさいと説いています。

　で、絶対自由とは何かというと、三界、つまり欲界・色界・無色界――まあわかりやすい言葉を使うならば、物理的世界・非物理的世界・超物理的世界――この三つを超越した状態に自分自身を置きなさいということが仏教です。つま



り、神を超えた存在が仏教なんです。

ですから、問題は何かというと、要するに、わたしに言わせると、一般的な仏陀の定義があまりにもサキャ神賢に対する、釈迦牟尼に対する冒とくなんですね、結論からいうと。つまり、神を超えた状態に仏陀が存在していらっしゃるということは、これは仏典でもそうですし、それから『創世期経』とかの経典を見てもはっきりわかっていることなんです。

それから、幸福の科学の方は、神を信じない宗教学者は言語道断だと言われていましたけど、わた

しは、宗教学者はまず宗教を信じてはいけないと思います。なぜならば、宗教を信じることによって、もう既に誤った見解に立つと。

　つまり、たんたんとものを見つめることから諸現象というものははっきりわかるわけですから――これは釈迦牟尼の教えもそうです、たんたんとものを見つめること、そこから始まるわけです。つまり仏教というのは、明らかに百パーセントの科学なんですよ。で、宗教学も、当然百パーセントの科学でなければなりませんから、そこで、信じる信じないという論議そのものがナンセンスです。

――本当のたんたんならば、それは既に、無常の境地に近いものがあって初めてたんたんなわけですよね。

**(尊師)** はい。

――そうだとしたら、宗教と無縁ではないんじゃないですか。

**(尊師)** そうではなくて、つまり信じる信じない、これを別にして、宗教というのは、例えば神でもい

いでしょう、「神というのは存在するのかな、しないのかな」、これが大切なわけです。神は初めから存在するというふうに固定的に見てしまったら、当然そこから謬見解が生じるといっているわけです。

### ◉精神世界と科学の関係

――精神世界と科学の関係について、どのようにお考えですか。

**(マイトレーヤ)** オウム真理教では、精神世界は科学であるという考え方をしているんですね。で、仏教は真理であって、真理の探求こそまさに科学だと思うわけですね。で、現代科学ではその手段というのが限られていますけれども、しかし、それはだんだんだんだん進歩しつつあると。で、だんだんだんだん精神世界、または真理ですね、それと科学が探求できる範囲というのが近づいてきていると考えているんですね。

それで、オウム真理教というのは、そういう実証的、経験的、科

学的アプローチをとろうとしているんです。で、科学的アプローチの一環としてね、本当に釈迦牟尼がいっているようなサマディ——そのときは心臓も呼吸も止まるというふうに仏典では書かれてあるんですが——そういうことがあるんだろうかと。だから、同じ修行をしたものが、そういう状況になるかどうか実際試してみようということで、水中クンバカだとか、※アンダーグラウンド・サマディとか、そういう実験をして公開しているわけですね。また、空中浮揚というものがあるんだろうかと。そういうものがあるのを示すために、自ら修行して、それをマスコミの皆さんの前で公開したということがあるわけですね。

　つまり、実証がなければね、なぜということがなければ、何が正しいかわからないじゃないかと、そういうことがあると思うんです。

（マンジュシュリー・ミトラ正悟師）今、科学が取り扱っている領域というのは、やはり、わたしたちの

※アンダーグラウンド・サマディ……完全に空気が遮断された、土の中に埋めたボックスの中で、サマディに入ること。

目から見ると狭いと。で、安心して話せる領域だけで話しているというところがあると思うんですね。ですから、手法としては、やはり科学的な手法、つまり仮説を立てて実証していくという手法、特に測定を伴った、物理的な証明、そういうふうにして、できるだけ、今、科学が扱える範囲を広げて、そしてわたしたちのまだ未知の領域まで証明範囲を広げていきたいと思っているわけです。

（マイトレーヤ）簡単にいうと、



統合の手段としては科学と同じ手段を使うわけですね。つまり、学



者がやるのと同じ手段。学者というのは、自分と相反した仮説、もしくは持論があったらば、それを証明によって闘わせて、そして生き残ったものを学説としてとらえますよね。それと同じように、経験的、実践的、そして検証的な方法を使ってやっていけばいいと。

もう一つは、我々がなぜ仏典研究をしていると申し上げたかというと、例えば、今仏教系の宗教団体はすごく多いんですね。で、仏陀の教えはこうであるとか、自分が仏陀であるとか、そういう教えを持っているところが多いんですね。で、仏陀釈迦牟尼の教えであるとおっしゃっている。

しかし、少し仏陀釈迦牟尼の教えと違うとこがあるんじゃないかという気がするんですね。で、それを探るために最古の仏典を見ていって、正確に翻訳をして、それと照らし合わせていくということをやっているわけです。

### ◉判定する材料は仏典しかない

——何か宗教もですね、証明の世界、科学の世界ということですが、そのへんのところをもう少しおっしゃっていただかないと、誤解を生むのではないかと思うんですが。

(尊師) どういうことかといいますと、例えば仏典をお読みになっておわかりのとおり、例えばサマディというのは呼吸が停止しなければサマディと呼ばないと。そして、それ以外に呼吸をしているときのいろんな体験は、魔境であると、幻影であると、これははっきりと仏典に書かれているわけです。

ですから、オウム真理教でいっている科学というのは、例えば呼

吸が停止しているかどうかは、呼吸停止の状態を科学的に測定すればいいじゃないかと。で、それ以外は偽物であると。スパッと仏教的見地からいくとですよ。それが仏教的な見地でなければ、例えばいろんな教祖の方が、「いや、俺はこうなんだ」とおっしゃる分はそれは構わないと。しかし、仏教とか仏陀とか名乗る場合は、あくまでも仏典に照らし合わせて判定する以外に、判定する材料がないじゃないかと。

なぜならば、例えば裁判だってそうですよね。法律があって裁判官は裁くと。それと同じように、仏典があって、仏教的な見地ではどちらが正しいのかと判定する以外にないじゃないかと。思い込むのも自由ですし、宣伝するのも自由です。しかし、真実はそうであると。で、わたしたちが求めているのは真実だけです。

——さっきから疑問なんですが、仏典の研究をしたり翻訳をしたら、その人が救われるかとかですね、

そうではないと思うんですが。

（尊師）それは、間違っています。なぜ間違っているといえるかというと、ここに空腹の者がいたとしましょう。この空腹の者は、例えばそこに毒まんじゅうがあって食べたと。そのときは、満腹になりますから安定します、心は。しかしその後、毒によってものすごく苦しまなければならない。つまり、宗教にはそういう危険性があるんです。そして、それをチェックするために経典があるんです。

## ◉神通力は仏教の重要なファクト

——オウム真理教では、超能力とはいわず神通力というんだそうですが、それはオウム真理教の中の重要なファクトになるわけですか。

（尊師）いや、というよりも、仏教の重要なファクトです。つまり、仏教において、例えば解脱をしていく過程においてこの神通力が身につかないということは、それは嘘であると経典に書かれてあるわ

けですね。

その前の段階で呼吸が停止して、その後、六つの神通力のステップを踏んで、最終的に、完全に煩悩が滅尽された状態が生じてくるという考え方。つまり、何を言いたいかというと、どんどん神の高い段階に至っていくわけですよ。で、最終的に神を超越した状態、それが十力者なんですね。ですから、実際、仏陀という言葉も正しくなくて、真理勝者とか、あるいは十力者という方が正しいわけですけども、つまり十の要素を持っている魂が、仏陀というか、仏教の最終ステージなわけです。

――今日、今ここにいらっしゃるオウム真理教の方は、だいたいそういうことができる方ですか。

**(尊師)** かなりのことはできます。例えば、常人に比べてかなり代謝も落ちていますし。代謝というのは、要するに、肉体における酸素消費量というものは、呼吸の停止とものすごく大きなかかわりがありまして、で、ステージが上がっ

ていくと同時に代謝が落ちてくるわけですね。
——では、息をしなくて、ずっといられるということですか。
**(尊師)** 呼吸については、長いですね、みんな。
——例えばここで、ちょっと実験してもらえますか。それは、しないんですか。
**(尊師)** それは、※十一月の十二日に行ないます。
——今日は駄目なんですか。
**(尊師)** いや、つまり準備が必要



なわけです。

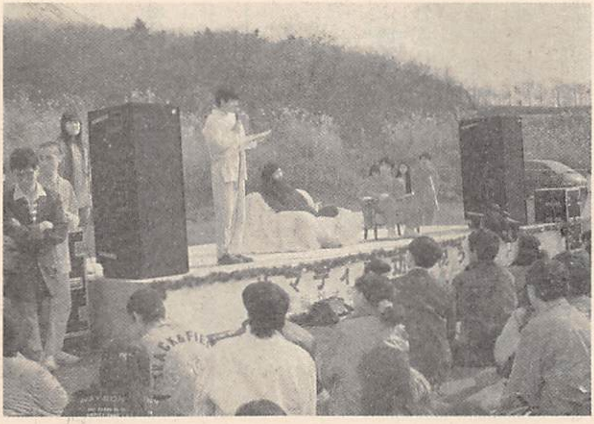
——トレーニングが必要なわけですか。

**(尊師)** つまり、こういう世俗的な空間に入っていると、いろいろとエネルギーをロスするとか、そういう要素がありますので、そういう準備が必要なわけです。

——例えば、どういうことをされるんですか、神通力というのは。具体的に現象でいうと。息を止めたりとかされるんですか。

**(尊師)** 例えば、六つの神通力と

※一九九一年十一月十二日から、マイトレーヤ正悟師が五日間のアンダーグラウンド・サマディに入られ、見事に成功した。現在、正大師（大乗のヨーガの成就者）、正悟師（マハー・ムドラーの成就者）による連続アンダーグラウンド・サマディが行なわれており、一週間、十日と徐々に期間を延ばしていく予定である。



いいまして、これは、相手の夢の中に自在に現われるとか、あるいは体を持ち上げるとか、あるいは神々と会話をするとかですね、あるいは他人の心を完全に読み取るとか、あるいは前生を見るとか、あるいは来世どの世界へ転生するかを知るとか、あるいは最後に、その人はどの程度の煩悩を有しているかを見るとか――まあ、これが漏尽通といわれているわけですけども――そういう六つの神通力のプロセスを通過して、その後に完全な状態が訪れるということです。

### ◉仏典を強調する理由

――先程から仏典というものがよく出てきますが、どうしてそれをそれほど強調されるのか……。

（尊師）一つ言っておきたいことは、共産主義がそうであったように、まず理想的共産主義があったと。しかし、それは現実化しなかったと。よって、現実的な共産主義

へ移行したと。これは流れとしてはわかると思うんです。しかし、理論的に見た場合、どちらの方がわかりやすかったかと、あるいは理想的だったかというと、当然それは理想的共産主義だったでしょうと。

つまり、何を言いたいかというと、理論というのは、ちょっと頭のいい人がいたら、それは組み立てるのは簡単なんですね。で、それが、本当であるか嘘であるかということが大切な問題であって、本当であるかどうかを、だからわたしたちが裏づけるために、少なくとも二千六百年前にお生まれになった釈迦牟尼の教えを忠実に再現することによって、自分たちの体験しているものの裏づけをしているわけです。で、裏づけをしない限り、例えば、地図がないのにね、ここから大阪へ行きなさいといって行けるわけないでしょう。そういうことですよね、要するに、経典の裏づけというのは。

そういう裏づけがなくて、教祖

が言ったから正しいんだという判断で走った場合、本当にその人たちすべてが幸福になれるかどうかという問題が、わたしは大切なんだということを言っているわけです。

**（マイトレーヤ）** いろいろな意見の方がいらっしゃると思うんですね、要するに宗教団体の活動の仕方に関しては。だから、宗教団体の本質というのは、やっぱり宗教教義であると。で、その教義というのは、もう厳密を期さなければいけないと。

で、麻原尊師が言われたのは、仏陀の教えと称しながら仏陀の教えでないものをやっていないかと。で、幸福の科学の方が、仏陀の教えかどうかは本を読んでみればわかるというふうにおっしゃった。で、それで納得する方と納得されない方がいて、また証明を求める方もいると。で、ここに二つのタイプがあると思うんです。まあ何となく納得してしまうと。それからもう一つは、さらにより深く検

証しようというタイプ。

で、やはり科学というのは、定義としてやっぱり、知性をもって何らかの探求をするということがあると思うんですね。で、そういうことで我々がやっているのが仏典研究なんですよ。例えば、ちょっと例を挙げさせていただきたいんですけども、要するに、仏陀というからには、釈迦牟尼というからには一人なわけですから、二千六百年前も今もやっぱり同じこと言っていなければいけないわけですよ。

ただ、我々が仏典からひもといた教えと、それから仏陀さまといわれている方が、今流布している、まあいろいろいらっしゃいますけど、それが違うわけですね。

## ◉高い意識状態に至るための実践

――今までの論議を聞いていると、なぜ話すときに、例えば仏陀はこうだとか、何はこうであるというふうに宗教家の方は断言なさるんでしょうか。



（尊師）例えばここに、科学の公式があります。で、その公式を、実際に、実験することによって確認すると。これが現代の教育だと思います。同じように、例えばわたしたちは、瞑想その他の実践を行なっていまして、それを、いったいこれはどういう意味があるのかということを裏づけるために経典を使っていると。で、つまり、論理があって、裏づけがしっかりとそれに合致しているから、それは絶対であるというしかないと。もし、それを否定されるならば、科学の公式と、それから現象との一致、これも当然否定されなければ



ばならないという立場に立っています。よろしいでしょうか。

――要するに、科学で論理的であるから絶対だというわけですね。

（尊師）いや、そうではなくて、論理があって、それを実験によって検証すると。まず、科学は論理があって、つまり公式があって、それを実験することによってその公式が正しいんだというのを検証してわたしたちは科学を信じていると。次の段階で、同じように、例えば経典があって、瞑想のプロセスにおいてそれを経験していくことによって、その経典は絶対なんだというようにわたしは確信を

持つと。よって、科学が絶対であるならば宗教も絶対であるという理論です。

——それと、現代日本の日常生活を説明なさる関係とか、例えば。「宗教と若者」ですので、できれば若者にわかるように。

**（尊師）** じゃ、わたしたちがふだん生きている〝わたし〟というものをとらえた場合、どうなのかと。つまり、わたしを支えるだけの、例えば理論とか、そういうものが存在しているのかと。で、実際、今の〝わたし〟からステップアップして高い意識状態に至っていくわけですが、その高い意識状態に至っていくための実践がなされているのかということですね。で、まあこれは、若者だけじゃなくて、これはすべての人が実践しなければならないと考えているわけですが、教義を学ぶ、そして検証する、つまり実践する、それをまた教義によって裏づける、これを繰り返されることによって現代の若者というのは、大きな利益を得るとわ

たしは思います。

——オウム真理教がいろんなことをおやりになる、それは科学的に実証しているんだとおっしゃいましたね。で、科学的に実証できたときに、つまりその宗教に科学が合致する、そこで証明されるんだというような言い方をされたと思うんですが。

（尊師）いや、そうではない。つまり、例えば科学というものをとらえた場合、そこに例えばだれかが発見した公式があって、それを実験することによってその公式を納得するでしょうと。つまり、これは、科学はあくまでも科学です。それと同じように、精神世界にも同じことがいえまして、まあ、ある人が世界観を打ち立てたと。その打ち立てた人が、例えば二千五百年前の釈迦牟尼であるとしましょう。で、これについてはいろんな公式がありまして、これを実践することによって、経典の世界を一つずつ経験して上がっていけるんだという教えがあるわけです。

要するに、科学というものがあって、その科学に対する実証の方法は、公式があってそれを実験することによって検証するんだと。そうやって信じるんだと。で、宗教についても、わたしたちが考えていることは、同じように、経典があって、そこに公式がうたれていて、それを実践することによって、その経典にうたれている世界観のステップアップがあるんだということですね。

——構造的にはですね、科学と宗教というのはパラレルであるというふうに言われているんですか。

(マイトレーヤ) つまり、実体験が主なんだということですね。それで、実体験をする、要するに経典に基づいて同じ修行をして実体験する。経典に書かれている釈迦牟尼の体験と一致すると。で、そういう人が、百人、二百人、三百人と増えていく。で、同じような修行している外国の人が、また同じような体験をする。そうやって、ある意味で統計的に集めていくわ

けです。

（尊師）パラレルであるということは、それは正しくないと。なぜそういえるかというと、例えばここに、ある薬が発売されたと。その薬に対しては、例えば目くらまし実験――要するに、その薬である、ないという二タイプを混ぜて例えば投与すると。で、そのパーセンテージによって、この薬は効くんだ効かないんだという実験をしていると。これは現代の科学です。

## ◉仏典＝共通の言葉

――そういうことをやっているから、既成宗教は駄目だとおっしゃったんでしょうか。禅にしてもね、極めて曖昧なものだということですか。

（尊師）わたしは禅を否定していません。一番初めにも説明しましたとおり、禅というのは、まあ禅の経典がありまして、それは仏教の経典の中の一部なんですね。で、



仏教というのは、全体的にはヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナという三つの修行体系から成り立っていまして、その三つの体系の全体系を日本に降ろしてあげることが――つまり日本人は知的レベルが高いですから――降ろしてあげて、その人たちが自分に合った修行法をすればいいじゃないかということが、今のオウム真理教の立場なんです。ですから、禅を否定しているわけじゃなくて、いや禅は一つの悟りの方法として、これはインド・ヨーガのラージャ・ヨーガの体系と全く同じですし、素晴らしい体系だとわたしは考えています。

**（ヤソーダラー正大師）** 例えば、わたしは修行に入るのに否定から入ったんです。アンチ宗教だったんですね。しかし、尊師がおっしゃっ



ている世界観を、自分が修行することによって同じことを体験していく。それだったら、もう信じるしかないんですよ。

——その同じであるという保証は何ですか。あなたの体験と尊師の体験が同じである保証は何ですか。

**(カンカー・レーヴァタ師)** あの、ここでちょっとつけ加えたいんですけども、幸福の科学の方は、仏教は中国を渡って日本に来たという、北伝系のことしか言っていませんけども、仏教には——これはある程度、仏教を知っている人にはわかると思うんですけど——南伝系の流れというのがちゃんとあるわけで、スリランカ、それからタイ、ラオスといった流れがあるわけです。

で、日本人の知っている仏教というのは、いわゆるその片一方の

系統しかないと。で、もう一方の南伝系の系統には、先程言った超能力であるとか――まあ神通といいますけども――そういったものの記述というのは明確にあります、それは。例えば、悟りの最終段階というような明確な記述があるわけです。で、そういった二千五百年前の教えが一つあって、こうなったらこうなる、こうなったらこうなるというのがあって、それを釈迦牟尼の時代から二千五百年後の我々もやってみて、で、この人もそれをやったらこうなった、その人もこれをやったらこうなった、同じであるというふうになったら、これはまあ信じるしかないと。

（マイトレーヤ）つまり、現象なわけです。同じ修行をやって同じ現象を体験したと。そうしたならば、その世界は信じざるを得ないわけですね。

――もう一度お聞きしますが、それが同じであるとする保証がどうしてあるんでしょうか。簡単に聞きたいのは、真理だというならば、

チベットの人たちはあなたのこと信じますか。あなたたちの教義を信じますか。

**（尊師）** 例えば、チベットの高僧のカムトゥール・リンポチェ、これは解脱者といわれているわけですけど、わたしのことをイエシェ（絶対なる、完全なる神の叡智）といっています。

——では、麻原さんは、チベットの普通の人たちと仮に話すとした場合、何語でコミュニケートしますか。それは言葉ですか。体験と



いっても、言葉が通じなかったら、無理なんじゃないんですか。

（尊師）ですから、共通の言葉があるわけです、仏典という。仏典という言葉があるわけです。

## ◉仏教の深い教え

（尊師）つまり、大川隆法氏が仏陀である、ないということが問題なんであって、要するに、幸福の科学の教えそのものが正しくないとか正しいといっているわけじゃないんですね、オウム真理教は。つまり仏典の教えと違うから、仏教ではないといっているわけですよ。ここは勘違いしていただきたくない。だから、幸福の科学に入信なさって幸福だとお感じになられる方がいらっしゃったら、それはそれでわたしたちは否定する必要もないですし、また何を言う必要もないと思います。

――先程から仏典というおっしゃり方をされていますけれども、経典の歴史という、ある程度客観的

なものに根づかせなければ、幸福などということを論じてはいけないのだということを含んでいるわけですか。

（尊師）その前に、まず仏教というのは幸福を説いていません。仏典はあくまでも――それは禅の目的もそうですけど、現世における行為をなすことにおける幸福を説いてないといっているわけです。仏典で説いている幸福というものは、完全な煩悩破壊なんです。

何を言いたいかというと、一般にいわれている幸福、今日本人が知っている言葉の幸福という言葉は使えないんだといっているわけです。

――幸福といっても、あるいは悟りといっても、煩悩の破壊といっても何でもいいけれども、要はどうやったら本当にそういう幸福感を、他人を幸せにするような幸福感を感じることができるのかという、それが一番重要なんじゃないんですか。本当の幸福って何なんだろう、それはどういうもんで、

どうしたらそれが得られるんだろうということをお聞きしたいですね。

（尊師）実際例えば、幸福というのは不幸の上に成り立っていると。つまり、先程、幸福の科学の会員の方もおっしゃいましたけども、幸福の科学に入って幸福感を感じたんだと。ということは、それまでは不幸だったんだと。ところが、仏教の説いているものは、そういう不幸・幸福という二元的な世界ではなくて、一元の世界を説いているわけです。絶対的に壊れない、絶対的な安定したものを説いているわけです。





ですから、そういう意味で、例えば、じゃあゴミを毎日拾ったら、それはどうなんだと。それは、確かに悟りに到達するでしょう、段階的にね。それはそれで素晴らしいことだと思います。しかし、それは教義の、本当にスタートの話であって、それイコール幸福の科学の前提を論じることは当然できないでしょうし、またここでそれを論議する意味合いというか、宗教、あるいは仏教を論議する意味合いとしては、あまりにも低次元の話だとわたしは思います。

――犬のウンコを拾うことが良心の現われだというような幸福の科

学の主張もあったわけですが、そのことについてはどのようにお考えでしょうか。

**（ヤソーダラー）** ただ単に道徳観で話しているような気がするんですけれども。

**（尊師）** 一つ言わせていただきたいのは、ウンチを拾う、これはまあそれはそれでいいでしょう。あるいは、だれかね、電車に座っていてそれを代わってあげる、これもこれでいいでしょう。しかし、それを例えば他人がどう言おうと、



それをよしと考えるんだったら別に問題はないと思います。

というよりも逆に、それによって「あいつ変なんじゃないか」というふうに見られたとしても、本人は批判されることによって自分の心が浄化されるわけですし、それは仏教観でも第三ステージに忍辱のステージというのがありますから。

## ◉尊師の幅広い叡智

――尊師にも予言の力がおありになるそうですが、予言のことについて少しお聞かせ願えますか。

**（尊師）**まず、よ言者には二つあります。そのよ言者は　一つは「預かる」方の預言者と。そしてもう一つは、未来を見る予言者がいます。これはサキャ神賢は、釈迦牟尼は明らかに後者のタイプの予言者でして、それから『旧約聖書』に出てくるよ言者のタイプも、これは二つに分かれています。で、この前者と後者の違いは何かというと、要するに前者は霊媒現象と。で、後者は、かなりステージが高

くて、そして最終的な地点に到達したり、あるいはそれに近い人であったということが、これはおそらく宗教学の上からもそれは証明されているというか、一般的にいわれていることじゃないかと思いますね。

――例えば、人間だけが霊魂があるんであれば、例えば脳のない子供とか、牛だとか、微生物とか、そういったものにも霊魂というものはあるんでしょうか。

（尊師）ええ、もちろんそれは存在しています。で、これについては人間もそうですけども、例えば人間が肉体を有すると。この場合、まず自分の肉体の、前生においてのいろいろなエネルギーの蓄積によって次の生が決定されるわけですけども、その蓄積が、次の母親の子宮に意識が入ると同時に、精子と卵子の結合という形で行なわれます。で、結局、その人の意識と、細胞の分化という、その二つの形が進みまして、で、まあ出産に至ると。

でまあ、確かに形あるものをつくるとき、そこに何らかの意識体――あるいはまあ霊体でもいいでしょうけども――が存在していることは事実だと思います。

――最後に、「幸福」ということを含めて、お言葉をお願いします。

（尊師）まず苦難というのは、苦というのはけがれなんですね。ですから、それをまずクリアにした後に幸福の像というもののデータをインプットするならば、それは正確に神に至っていく道を歩くことになるでしょうけども、しかしそうではなくて、例えばけがれをそのままにしておいて、幸福のいろいろなデータを入れていくならば、その段階で煩悩という、一つの屈折によって、その人がひずんだ形の人格の成長をしていくと。これが仏教の教えなんですよ。

ですから、前提で、苦、苦を滅尽する、これは最も大切なことなんですね。ですから、そこにもし触れていないとしたら、それは大きな問題だと思います。

## 第7話

# 尊師、幸福の科学を語る




『i-D JAPAN』

1991年12月号より

取材・構成＝長岡　雲国斎(ユー・ピー・ユー)



9月27日の深夜、麻原彰晃が突然テレビに現れた。「朝まで生テレビ」に特製のソファーごと乗り込み、あの幸福の科学の幹部に舌戦をもちかけたのだ。

怒鳴り合いは白熱した。論戦中、思わず本音が出てしまい、幸福の科学の幹部を「バカ」とコキおろして陳謝した田原総一朗。「フライデーは良心を捨てた極道」という石川好の穏当を欠く発言には、ホンモノの極道さんから「極道は良心はなくても義理は守るで」と抗議が入った。講談社社員と名乗る男より、謎の抗議電話も舞い込んだ。視聴率は深夜としては異例の5パーセントを超えたそうだ。

しかし、肝心の宗教論議はどうだったか。イラダチを隠しきれない麻原彰晃が「この番組は宗教を馬鹿にするために作られているん



ですか」「こんな論議が続くなら、帰らせてもらう！」とバクハツする場面もあったのだ。

## ◉景山民夫は幸福の科学をやめる？

『私に言わせれば、まるで井戸端会議でしたね。それぞれが言いたいことを言っているだけで、話が趣旨と違う方向にどんどん行ってしまう。

私が出演にあたって期待したのは、宗教で若者が救えるかということだったわけです。ところが内容としてはそうじゃなくて、イヌのウンチ①の話に終始しました。なぜイヌのウンチについてあれほど話さなければならないのか。イヌのウンチですよ。3回も4回もイヌのウンチの話をする。不本意でしたね。

①イヌのウンチ

幸福の科学正会員の景山民夫によれば、公園を散歩させた犬の糞を迷いなく堂々と胸を張って拾えるのも神の導きなんだそうだ。「朝まで生テレビ」では、それが神の導きであるのか、それとも、ただの良心であるのか、何度も論議の対象となった。それにしても、糞、ウンコ、クソ、大便と多様な表現の可能性があるなかで、あえてウンチの言葉を選び、しかもそれを可愛らしく連呼した麻原彰晃の言語感覚に、類稀なスター性を感じないではいられなかった。

その一方で、私が教義について話そうとすると、すぐに司会の田原さんに止められてしまうんです。私が言ってないことを言ったとおっしゃって人を責めようとしたり。私たちを呼んで新宗教のイメージダウンをはかろうとしたんじゃないかとさえ番組の途中で思えてきました。ひと言で言うなら、田原さんはかわいそうな人ですね。テレビ局の意図のとおりに番組を進めなければならなかったんでしょう。それにしても、もっと知的な

人だと思っていたんですが。

それと、朝日ジャーナル編集長の下村満子さん、あの方はかなり宗教というものに対する決めつけが強い人だなあ（笑）。

景山民夫さんは、もう少ししたら幸福の科学をやめるんじゃないですか。番組の前半と後半の彼の態度が明らかに違っていた。前半はたしかに幸福の科学の会員というものを強くアピールされていましたけど、後半はそうでなくて、社会問題を一生懸命アピールすることで自分の立場というものを守ろうとしていた。私にはそういう印象が残りました。

西部邁先生、栗本慎一郎先生、島田裕巳先生、中島渉先生は、オウム真理教の宗教に対するスタンスというものを、ものすごく高く評価してくださったと思います。番組終了直後に出演者による懇親会がありましたが、その時、西部先生は「きょうはオウム真理教の宣伝会みたいになっちゃったな」と苦笑しておられました。まあ、

私としては、もっと発言したかったし、オウムの教義についてきちんと説明させていただけたなら、100倍も効果があったと思うんです。

もっとも、テレビの生番組に教団のトップが自ら乗り込んでいくというのは、利口じゃありませんよね。番組で教祖が論破され傷つけられたら、教団はオシマイですよ。ああいうことを軽率にするから、麻原はバカだって言われるんだ（笑）。幸福の科学の場合は、教団の幹部や有名人会員が先頭に立っているみたいですね。戦い方としては、間違いなくオウムより幸福の科学の方が上です（笑）。

だいたい教祖たるものは、ああいう俗っぽいところへ軽々しく顔を出したりしないで、奥の奥に隠れて表舞台に出ないほうが、ありがたみというものが高まるんです。でも、私は一人の宗教者として、これ以上黙っていられなかったんですね。大川さんの説く、ねじまがった仏法について黙っていたら、




害が大きすぎる、幸福の科学の会員がかわいそうだと考えたわけです。』

　コトの発端は9月末に出版された『幸福の科学の会員よ聞きなさい！　真実の仏陀の教えはこうだ！』（オウム出版）という本だ。この中で麻原彰晃は仏教修行者の立場②から、大川隆法の説く仏教解釈はデタラメだとして、幸福の科学の教義を撫で斬りにしている。

「僕ら、あの本気持ちわるくて、読めない」（週刊文春）と大川隆

法に言わせた本で、麻原彰晃はいったい何を訴えようとしたのだろうか。

②仏教修行者の立場

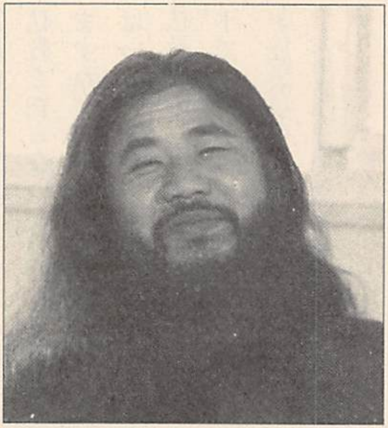
教祖麻原彰晃が放つ過剰なまでのオーラ、選挙でのパワー溢れるパフォーマンス、空中浮揚などの神通力の強調、そして、おそらくは未解決になっている事件のあやふやなイメージから、オウム真理教は麻原彰晃の言動をそのまま盲信的に教義にしている教団と思われがちだが、これは誤解。オウム真理教は教えの根本を原始仏典に求めている。南方仏教の伝統をマニアックに受け継ごうとする姿勢は、〝原始仏教オタク〟と言っても見当違いじゃないだろう。

『大川さんは2600年前の仏陀の生まれ変わり③だそうですね。その前提に立てば、当然2600年前に仏陀が残した仏法と、彼が現在において語ることとの間に共通点がなければなりません。時代が大きく離れているのですから、派生する比喩みたいなものが変化するのは仕方ないでしょう。しか

し、本質の部分が変わるのはおかしい。
彼の著書は三〇冊ほど読みました。中心になる本はぜんぶ読んだと思います。読んで感じることは、仏教を知らないということに尽きますね。いろんな宗教をかじってはいるんでしょうが、少なくとも仏教に関してはまったくのドシロートです。

③仏陀の生まれ変わり
大川隆法は自らを仏陀の生まれ変わりだと説いている。テレビのインタビューでその証拠を見せろと問われて、「仏陀であることは私の教えを見ればわかる。証拠は教えの中にしかない」と答えていた。つまり、信じろ、そうすればわかるという仕組みだ。これってズルい気がする。わかる人にしかわからないという論法は世間じゃセンズリと呼ばれている。それはともかく、幸福の科学の会員は大川隆法を〝仏陀さま〟と呼び、その写真に毎日手を合わせている。

八正道④にしても、六波羅蜜にしても、彼の読み方は表面的で、しかも今まで仏教を研究してきた

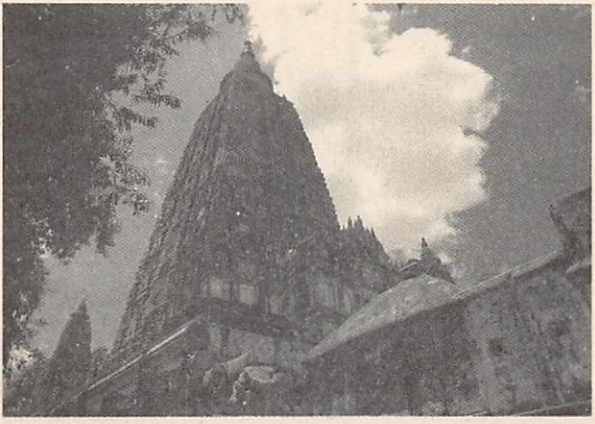


者が誰もなしえてない奇異な解釈です。
一部だけ説明しましょう。
八正道とは、仏教の根幹となる教えであり、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定という八つの聖なる道から成り立っています。原始仏典を読めばわかりますが、この八つの聖なる道の順番には意味があるんですね。ところが、大川さんは著書の中でこの順番を自分勝手に入れ替えている。しかも著書によってコロコロ順番が入れ替わるという、いい加減さです。大川さんの教えは、この八正道に重きを置き、八正道を反省の方法として扱っておられ

るようです。しかし、そんなことは仏典のどこにも書かれていません。八正道とは、正離解脱⑤という至高の境地にたどりつくための具体的な実践の方法であって、断じて、単なる反省法ではない。

④八正道

釈迦牟尼が説いた、仏教を実践するうえで欠かせない8つの基本的な教え。〝生まれ変わり〟大川隆法も当然この八正道について語らずにはいられないわけで、『真説・八正道　自己変革のすすめ』（幸福の科学出版）という本で、



現代人の生活に即した八正道を説いている。この本は〝基本書〟と呼ばれる幸福の科学の理論書のなかにあって会員の間でかなり人気が高い。が、麻原彰晃に言わせると「うーん、いったい何が言いたいんだろう」であるそうだ。

⑤正離解脱

苦しい修行を重ねた上でたどりつく最高の境地。平たく言えば、悟り。オウム真理教は、この境地にたどりつくため、原始仏典を翻訳し、そこに記されたノウハウ（瞑想法、呼吸法など）を、科学を借りながら、そのまんま実践するという荒行に打ち込んでいる。

実際、オウムの肉体鍛錬は超人的だ。取材の折、麻原彰晃は「こういうことを言うから私は軽いって言われるんだ」と前置きしたうえで、「いずれオウムからオリンピック選手を出す」と我々に宣言した。

それぞれの道についての解釈も、ひどいものです。大川さんの著書では、正見を〝正しく見ること〟、正念を〝正しく念じること〟、正業を〝正しい仕事〟と文字のままに解釈し、だらだらと説明を加えていますが、それは漢字を見ただ

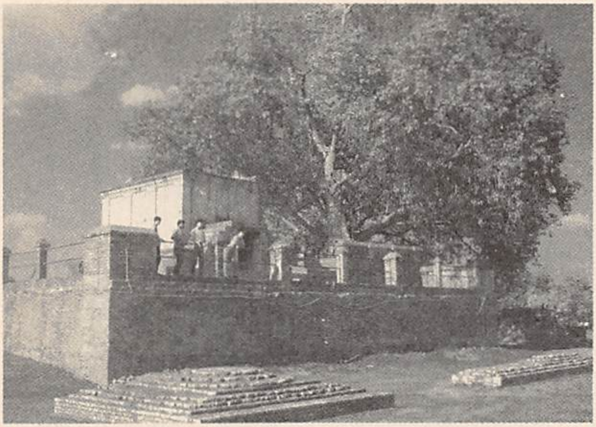
けの誤った解釈です。パーリ語の仏典に当たると、正見は〝正しい見解〟であり、正念は〝正しい記憶修習〟であり、正業は〝正しい行為〟です。そう解釈しないと、文意がつながりません。

彼にはこの種の、字面のみを追ったデタラメが目立ちますね。大川さんは『釈迦の本心』のなかで、仏教の基本的な修行体系である六波羅蜜を説こうとして、「波羅蜜多」という字句を〝蜜が多いこと〟と説明しています。こんなおかしな解釈は聞いたことがない。波羅蜜多は、徹底とか極限という意味のパーリ語の「パーラミター」が原語です。これがインドから中国へ伝わる段階で、中国の高僧によって、発音が似ている漢字の音「波羅蜜多」の四字が当てられた。だから本来漢字には意味がないんです。それなのに、大川さんは〝蜜が多い〟なんて前代未聞の解釈を得意になってしている。詳しいことは本に書きましたが、大川さんの著書は、コメディーとして読ん

だら、こんなに楽しい読み物はないですよ（笑）。それと、彼の教えに特徴的なのは、中心がないということです。通常、教えには根本的な中心があり、教えの中心となるものは変わらないはずです。ところが、彼の教えは本によって中心がズレている。もっと言えば、教えの中心が存在しない。幸福の科学は大川さんの書くこと、話すことが、すなわち教えだという形をとっていますから、それは致し方ないのかもしれません。それにしても、どの本も似たり寄ったりの本で、書かれてある表面的なことは同じことの繰り返しなのに、肝心の教えの中心がズレているというのは、読んでいて、おもしろい。実に、おもしろいです。』

## ◉大川さんは修行が足りんのです

『幸福の科学にしてみれば、原始仏典に立ち帰らなくても、現に目の前に〝仏陀さま〟がいるのだから、その教えに従えばいいではな



いか、という反論はあるかもしれません。しかし、仏陀にしては、大川さんの教えは曖昧で、情緒的に過ぎます。大川さんが悟りの境地に達している仏陀であるなら、情緒を完全に超えたところにいるはずですからね。

大川さんについて、ひとつだけ判っていることがあります。彼は、今、魔境⑥にいます。彼がチャネリングを行なっているとするなら、それは明らかですよ。

実は、チャネリング、霊媒は、魔境というステージにいるときに顕著に出てくる現象なんです。魂が精神世界に首を突っ込み出したときに、ある段階に来ると、魔境に必ず入ります。かつて私にもチャネリングの経験がありました。私の場合、お話ししたのは、人間界じゃなくて、もう少し上の魂でしたね。坂本龍馬の霊なんて降りてこなかったなあ（笑）。
でも、それは魔境という低いステージの現象なんです。修行の途

⑥魔境
瞑想用語。禅用語。文字通り、悪魔のいるような恐ろしいところ。麻原彰晃によれば、瞑想をはじめたばかりのビギナーが精神世界において必ず引っ掛かる関門。かつて麻原彰晃も魔境を漂ったことがあるそうだ。それとはぜんぜん関係ないが、宅八郎によれば、麻原彰晃は秋吉久美子とあべ静江の熱烈なファンであるとか。確かめてみたところ、「ええ。三矢サイダーのCMが好きでした」と打ち明けてくれた。しかし、現在は、まったく関心がないとのことだ。

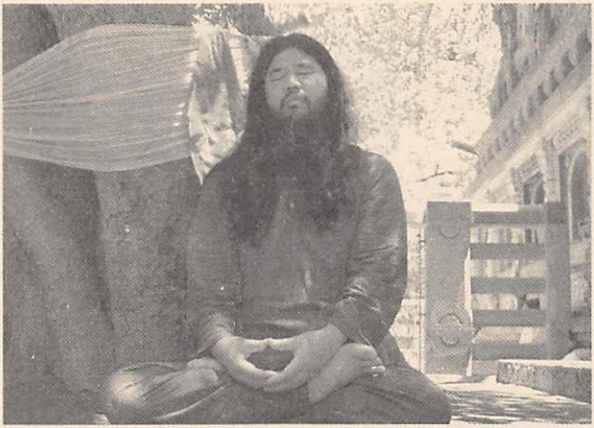
中の段階ですよ。そこを魔境だと知っていれば抜けられますけど、知らなければ、いつまでも抜けられない。結論から言うと、大川さんはまだまだ修行が足りんのですよ。』

## ◉幸福の科学は反論できない

今回のインタビューで、麻原彰晃は「選挙には出ない。もう出ません」と断言した。宗教家として、原始仏典、原始ヨーガの研究とその実践に身を捧げるというのだ。それだけに、大川隆法の語る幸福の科学が仏教の世界観と相容れないと説く舌鋒はスルドかった。

『仏教というのは、現世の苦悩からの解放が前提にあるわけなんです。現実世界のあらゆるものには変化が隠されています。いい変化ではなくて、わるい変化が必ず隠されている。たとえば、生まれた者は必ず死にます。若いときの美しさもいつかは衰え、醜くなる。そのことを思うと、だれもが不安

になり、苦しみを感じます。その苦しみからどうやって抜け出すかを考えるのが、仏教なんですね。
ところが、彼の教えはそうではない。八正道、六波羅蜜という仏教の言葉を使いながら、幸福になりましょうと人の煩悩ばかりを増大させていき、苦しみに強く引きこんでいく教えなんですね。
ここにドブ川があり、魚が泳いでいたとします。当然、魚はドブ川に混じる重金属や公害物質によって身体を痛め、苦しむことになります。この魚はドブ川を抜け出して清流で泳ぐべきなのですが、そのドブ川の底にはもっとおいしい餌があると誘うのが大川さんの法です。それを仏法の名のもとに説いているのです。たしかにそこにはおいしい餌もあるでしょうが、より以上の苦しみが存在しています。仏教の教えは、健康のときに誰も考えない病に対しての認識、若いときにあまり思わない死についての認識からスタートします。
大川さんの教えは、そういうこと



を一切隠して、今、この瞬間、豊かになりなさいと説いているだけです。

　そういう教えを仮に彼が仏教用語を使わずに広めようとするなら、勝手におやりなさい、といったところでしょう。会員が一〇万人、一〇〇万人と増えたとしても、私が口をはさむ必要はありません。しかし、彼は教えの中で仏教の言葉を用い、仏典をねじまげて人に説いている。そればかりか、自分を仏陀の生まれ変わりだと称して

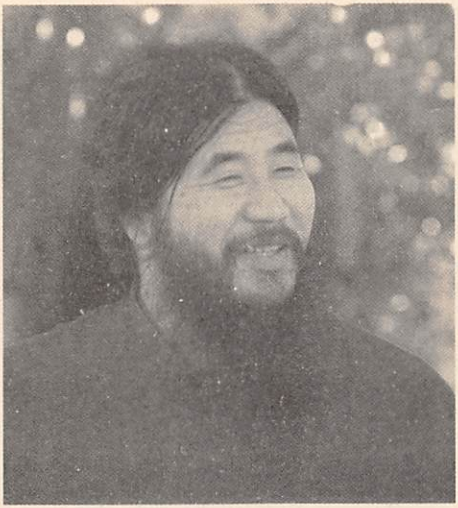
いるんです。これは仏教修行者として絶対に見過ごすことはできない。大川さんは必ず地獄に落ちます。彼の説くねじまがった仏法を信じ、それを実践する人も地獄への道を歩いていると言えましょう。

今のところ、私の本について大川さん自身の反論は聞いていません。感情的にぶつかるのは好みませんが、もし大川さんが仏法について討論をしたいというのであれば、喜んでお相手したい。大川さんは他の宗教の理解も怪しいところがある。キリスト教の〝愛〟と日常の〝愛情〟を混同していたりね。続編として『真実のイエスの教えはこうだ!』という本を書いて、それについて討論してもいい(笑)。

でも、おそらく大川さんは出てこないでしょう。なぜならば、私の書いた本について大川さんから反論の出てきようがない。「朝まで生テレビ」でも大川さん自身はいらっしゃらなかった。気持ちはよくわかるんです。幸福の科学の

教義、教団のスタイルからいって、
大川さんが公開討論に出演したり

したら、その結果、教団が崩壊す
るのは目に見えていますから。



# 第8話

# クリスマスを祝うなら、聖書ぐらい記憶してほしい




『SPA!』

1991年12月11日号より

オウム真理教の信徒の中でもクリスマスをやってる人はいるんじゃないかと思いますね。それは、かまいません。クリスマスは私にとってはゼロですから、そこまでは干渉しない。正月を祝うのと同じですね。

われわれには時間がないし、クリスマスをやる暇があったら修行をしたほうがいいんじゃないかという意見もあるでしょう。ですけど在家信徒の人たちが、たとえば友人とか社会的な関係でクリスマスを祝わなきゃならない場合は、それはしょうがないんじゃないかと思いますね。



私の家の宗教は仏教と神道でした。それでもイブの日には母親が、



寝てる間に靴下にお菓子を入れてくれる。翌朝「サンタクロースが持ってきたんだ」という話が出ましてね。私はサンタは本当にいるのかなと思って、次の年には薄目を開けて見ていたら、母親だった。しかしまあ、お菓子がもらえるから「サンタだサンタだ」と喜んだふりをしていました。

これが日本人のクリスマス観だと思うんですよね。つまり自分にとってどういう利益還元がなされるのかといったことに基づいている。

それにしても、キリストの誕生日という大きな意味のある祭を、

ちょっと軽んじすぎてるんじゃないかな。

また日本はパッケージ宗教の国でしょう。中身を学ばず外見で宗教を選択する。そういう意味では、キリスト教徒にとって最も失礼なのが日本のクリスマスではないかと思います。

クリスマスにしろ聖歌にしろ、その意味をしっかりと理解したうえで行うべきじゃないかと思うわけです。少なくとも聖書を記憶ぐらいはしないとね。

今から数年前ですが、私も娘にプレゼントを買ってあげたことはありますよ。クリスマスに興味があるようでしたから。私は、子供の興味に対して正確に応えるのが父親の義務だと考えていますので、一般ではこういう形でプレゼントの交換が成されているんだよ、ということで。たしか本だったと思いますがね。ええ、喜びましたよ。子供たちはクリスマスに関係あるなしにかかわらず、物を買ってあげると喜びますね。

## PART-6 願望成就の秘法

安全で確実な願望成就の秘法とは？ 仏教の教義にのっとった正しい願望成就法により、この世での願望は本人も気付かぬくらい自然とかなってしまう……。さらには、解脱・悟りにまで至れる方法を惜しげもなく公開。

B６判 定価９８０円

## PART-7 仏教真理 八正道

最終解脱者のみが語り得る八正道の真の意味合い。高い解脱・悟りへ至る道を、具体的に、現代でもすぐに実践できる方法として説き明かす。巻末に「道に関係づけられた経典（道相応）」の現代語訳も掲載。

B６判 定価８００円

## PART-8 仏教真理 六波羅蜜

大乗仏教における在家信徒の最も重要な修行法の一つ、六波羅蜜。この修行プロセスを着実に実践しさえすれば、在家でも必ず解脱へと至れる！ 巻末には、高弟たちの体験談の特別付録付き。

B６判 定価８００円

## PART-9 尊師、聖地インドを行く

尊師がインドを行く。不思議な神秘の力によって、様々な過去の事実を明かされる尊師。第一部では、信徒と共に行かれた巡礼の旅の全記録を、そして第二部ではなんと、今まで部外秘だった直弟子用奥儀説法を満載！

B６判 定価７５０円

## PART-10 仏教真理 五蘊無我



B6判 定価650円

わたしたち本来のものではない五蘊（形状・容姿、感覚、表象、経験の構成、識別）を我と錯覚し、迷妄に苦しむ人間。この五蘊を証智し超越することによって、わたしたちは人間を超え、神に至れるのである。

## PART-11 自己を超えて神となれ！



B6判 定価820円

——大人気を呼んだ尊師大学講演会特集——。東大、京大をはじめ、九一年の大学祭で尊師が若者に、現代における宗教の存在意義等について語られた模様を一挙掲載。

## PART-12 仏教真理 十二縁起



B6判 定価620円

サキャ神賢が初転法輪でお説きになった「十二縁起の法」。魂の落下と上昇のプロセスを克明にえがき、人間がこの世に生を受け、絶対的な自由の世界へ至る道程を明らかにする。

近日発刊予定

## PART-14 宗教の条件

B6判 予価620円



（価格にはすべて消費税が含まれています。）

●全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 本社 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL03(5370)1598

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

えんじょい・はぴねす

# Enjoy Happiness

# 月刊『えんじょい・はぴねす』




――主な内容――

◆Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて――えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」 麻原彰晃尊師

◆JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
――釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◆Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆あなたもわたしも創造主

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！

# 「幸せになりたい！
# でも、信徒になるのはちょっと……」
# そんなあなたに贈る
# 最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝ＥＨ会員〟になることができます。ＥＨ会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。
お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。

◉幸福情報を満載したＥＨ会員手帳をもれなくプレゼント！

◉成就者との対面および電話による悩み相談。

◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（ＥＨ会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとＥＨ会員となります。
なお、定期購読の申込みは６カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。



# 至福の未来をあなたの手に

## オウム真理教

AUM SHINRIKYO

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい



……などなど、様々な願いで頭がいっぱいのあなた。日本でただ一人の最終解脱者・麻原彰晃尊師率いるオウム真理教は、完璧な教義に裏付けられた最高の修行法で、あなたの夢を早く確実に実現します。素晴らしい未来を見つけに、あなたも気軽にオウム真理教の門を叩いてみませんか？

※資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

麻原彰晃の世界 PART13

資料請求券

◆各道場のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03 (3476) 5055
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1,　S.R.Germany

麻原彰晃の世界 PART13
『これが尊師！』
1992年 3月 6日　初版発行
定　価　570円（本体553円）
発行者　松本知子　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
〒154 東京都世田谷区世田谷2—8—17
電話　03（3439）6043　振替　東京2—109325

ISBN 4—87142—021—3　C0014　P570E

麻原彰晃の世界PART13

# これが尊師！



ISBN4-87142-021-3 C0014 P570E 定価570円（本体553円）